

長岡造形大学
地域協創センター

地域と協働し、地域を創る

20
25

地域協創センター について

センターは、本学の社会連携ポリシーに基づき、広い領域に関わるデザインの特性と教育研究力を活かして地域社会に新たな価値を創出するとともに、教育研究活動の成果を還元することによって地域に貢献することを目的に活動しています。

地域のデザインニーズを一元的に受け止め、有機的なプラットフォームとして教育研究との結びつきを最適化し、それらは様々な活動に実を結んでいます。

事業・活動等の実施にあたっては大学全体をあげて取り組み、そのコーディネーター役として専任教員であるセンター長と事務局を配置しています。

地域社会をデザインの実践的な学びの場とし、企業や自治体・コミュニティ等と協働した課題解決への取り組みを、「社会人基礎力」「構想力」「創造力」を育むアクティブラーニングとして、カリキュラムへの積極的な導入を図っています。



主な取り組みについて



産学官連携・地域社会との連携

デザイン研究開発

本学教員及び学生の研究力や人的資源を活かし、企業や自治体等と連携したデザイン研究開発を推進します。

まちづくり・環境づくりプロジェクト

企業や自治体、コミュニティ等と連携したデザインプロジェクトや地域イベントに、地域協創演習やボランティア実習の授業等を通じて取り組み、地域のまちづくり、環境づくりを推進します。

知的財産の管理活用

教育研究活動から生み出される特許や意匠権などを積極的に保護し、活用に取り組んでいます。



市民の生涯学習・文化活動の支援

市民工房

一般の方々を対象に、ものづくりの楽しさと創造の喜びを本格的な工房で体験できる多彩な講座を提供しています。

こどもものづくり大学校

小学生を対象に、ものづくりや遊びを通して、豊かな感性と創造力を育む場を提供しています。

まちなかキャンパス長岡

市民の方々の“学びと交流の拠点”として、学びを通じて世代や地域を越えた交流を盛んにすることを目的に、市内の4大学1高専が長岡市と連携して企画運営しています。

美術・デザイン勉強会

中学生・高校生を対象に、易しい手法で美術・デザインの専門性を体験する勉強会を行っています。

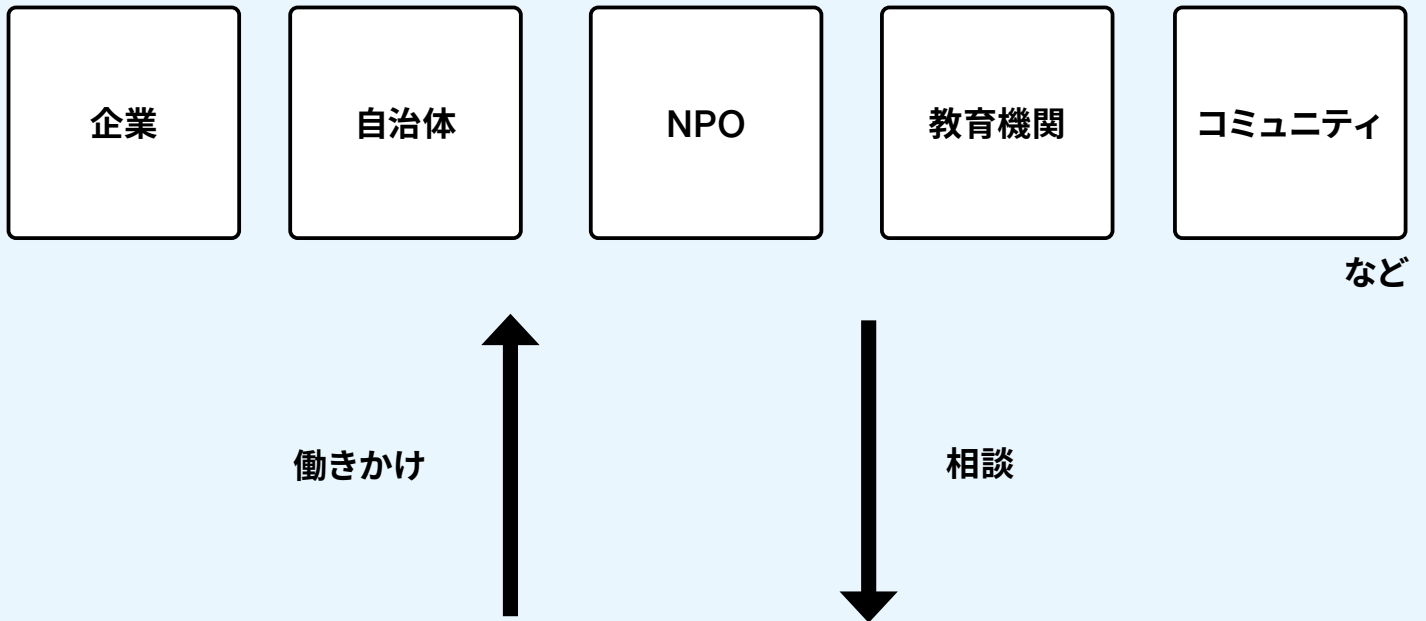
公開講座・講義

各分野で実践的に活躍されている方を講師としてお招きする授業「特別講義」等を一般公開しています。

施設の開放

図書館、ギャラリー、NIDホール、講義室、緑地・庭園等本学施設を市民のみなさんに開放しています。

🗨 センターへのご相談について



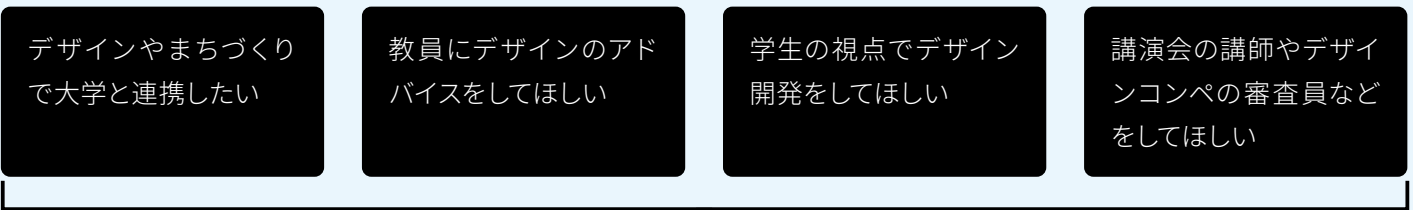
地域協創センター

相談内容に応じた連携方法をご提案します。
事務局（地域協創課）
電話 0258-21-3321 Eメール chiiki@nagaoka-id.ac.jp

◎知的財産について

本学では教員・学生の知的財産の保護に取り組んでいます。連携プロジェクト・授業等で知的財産が創出される場合、権利の帰属等に関して、契約書の取り交わしを行う等のご相談をさせていただきます。

ご相談の例



長岡造形大学ホームページから「依頼・相談申請書」をダウンロードし、必要事項を記入の上、地域協創センター事務局へ提出

打合せ
必要に応じて直接打合せを行います。関係する教員とスタッフで詳しい内容をお聞きし、ご相談内容に最も適した連携方法をご提案します。

デザイン研究開発
教員の研究分野について、研究費を受け入れて受託研究や共同研究を行っています。

地域協創演習等の授業
(学生を主体とした授業での取り組み)
学生にとって教育効果が高いと判断する場合に、授業内で教員が指導のもと学生が課題解決等に取り組みます。
※知的財産に関わる契約書等の取り交わしをする場合があります

講師派遣等
講演会やセミナー、デザイン審査等に専門家の知見を提供しています。

※ご相談に対する回答までには約1か月程度、業務開始までには約2～6か月程度かかります。教員や学生は授業・その他学事が優先となりますので、予めご了承ください。

デザインやアートを学びたい
(個人の方)

学生アルバイト・ボランティアを募集したい

学生をインターンシップで受け入れたい

大学既存プログラムの紹介
市民工房
(一般の方々を対象にしたものづくり講座)
こどもものづくり大学校
(小学校3～6年生を対象にしたものづくり講座)
まちなかキャンパス
(長岡市・長岡市内4大学1高専による各種講座を開催)

学生アルバイト・ボランティアの募集については、学生支援課をご紹介します。本学様式の「アルバイト求人票」は、本学ホームページからダウンロードすることができます。

インターンシップについては、学生への就職支援を行っているキャリアデザインセンターをご紹介します。

産学官連携・地域社会との連携

デザイン研究開発	8 - 36
知的財産の管理・活用	37 - 38
地域協創演習	39 - 61
ボランティア実習	62 - 63
地域特別プロジェクト演習	64 - 69

市民の生涯学習・文化活動の支援

長岡造形大学展示館「MàRoù の杜」	71
市民工房	72
こどもものづくり大学校	73
まちなかキャンパス長岡	74
第27回長岡市中学校美術部作品展	75
特別講義	76
出張講義	76
熱中！感動！夢づくり教育「夢づくり工房 in 長岡造形大学」	77
長岡造形大学附属図書館	78

**産学官連携・
地域社会との連携**

デザイン研究開発

企業や自治体、地域からの相談を受け、本学の教員と学生が課題の発見・解決に取り組んでいます。デザインの専門大学としてより高い価値、新しい価値の創出につながるような提案を目指すことで、地域社会と本学の教育研究が相互に良い関係を築けるよう努めています。

プロジェクト名：

燕市歴史的建造物総合調査

国登録有形文化財 今井家住宅 調査及び調査報告書作成業務

連携先：燕市教育委員会

受託期間：令和6年5月7日～令和7年3月31日

プロジェクト主査：平山 育男（学長）

プロジェクトメンバー：津村 泰範、西澤 哉子、梅嶋 修

1. はじめに

新潟県燕市より燕市吉田下町4-5に所在する「今井家住宅」について、屋敷地内の建造物及び屋敷地全体の調査について依頼を受けた。今井家住宅は既に、主屋、新座敷、西洋館、旧今井銀行店舗が国の登録有形文化財とされる。今回の調査は、各建造物の建築的特色や時期的変遷等を調査・考察するものである。各調査の項目は、沿革・構造・規模・形式・建築年代・後世の改変と復元的考察を基本とするものであった。

調査の内容は

- (1) 建造物現地詳細調査
- (2) 資料調査、聞き取り調査
- (3) その他、必要な調査
- (4) 調査報告書原稿作成

とするもので、報告書原稿などに基づいて燕市教育委員会が『燕市歴史的建造物調査報告書 今井家住宅』を作成・発行した。以下、一連の調査によって明らかとなった主屋、新座敷、西洋館、旧銀行棟の建築年代、建築後の変遷などを中心に報告を行う。

2. 建築調査で明らかとなった事項

2-1 主屋

・概要

主屋は木造一部2階建、切妻造棧瓦葺、正面19.3m、奥行23.9mの規模である。主屋は敷地の東側に位置し、吉田の町を南北に横断する公道に東面して建っている。主屋は正面向かって右側に玄関を設け、この奥に通土間が建物の背面まで配される町家形式の建物である。

・建築年代

主屋の建築年代は従来、江戸時代後期とされるに留まった。建物から建築年代を具体的に示す1次資料は見出されなかったが、主屋東側正面における^{けらば}蟻羽の出が深いこと、軒高さが低いこと、当初と判断できる部分では和釘が用いられることなどから、この建築年代は妥当と言える。但し、当初における規模と、現状における当初部分は明示されていなかった。今回の建築調査より、主屋の当初規模は正面5間半、奥行13間程度で、正面から2室目の「大茶の間」及び通り土間においては当初の仕様がよく残ると判断できるものの、それ以外の各室は、以下に述べる明治時代以後における増改築を確認で

きた。また、主屋は現状の屋根勾配から当初は板葺石置の形式で、棟は切石を置いたと判断できる。

・復原考察

主屋は正面から3室目以後と背面2階部分は建具の墨書より明治23(1890)年の建築と判断することができた。更に、明治26(1893)年になって主屋南側への増築があり、後述する離れ座敷と接続がなされたことが、板戸墨書より明らかとなった。

加えて、西洋館が明治25~28(1892~95)年頃に建築がなされたため、明治34(1901)年頃、この建物との接続のため主屋東側と、仏間周囲の整備のなされたことが建具墨書から明らかとなった。

主屋正面北側に位置する多間と呼ばれる諸室は、2階押入襖に大正7(1918)年の銘を持つ反古紙が用いられるため、大正時代中期の建築と判断した。

子ども部屋は隣接する金庫内に昭和5(1930)年10月24日付の新聞紙が貼られているため、昭和時代初期頃の建築と判断した。

2-2 新座敷

・概要

新座敷は木造平屋建、東側入母屋造、西側切妻造棧瓦葺で正面7.3m、奥行17.8mで主屋南側に位置する。

・建築年代

国登録の所見において新座敷の建築年代は「明治時代中期」とするが、建物には小屋組を中心として和釘の使用が確認できた。

ところで新座敷の中の間では襖障子に障壁画が描かれており、これに「景文」の銘を見出すことができた。これは松村景文とすることができ、活躍の時期を考慮すると、建物は江戸時代末期とするのが妥当と判断することができた。

・復原考察

新座敷の西側背面は、主屋南側に接続する。既に述べたように、この部分は主屋の増築に併せ明治26(1893)年に建築があった。また、北面東側の西洋館との境は西洋館の明治25~28(1892~95)年以後における整備で、境となる建具に明治33(1900)年の墨書があり、この時期に改修のあったことになる。

※所属等はプロジェクト当時のもの

2-3 西洋館

・概要

西洋館は木骨煉瓦造フランス積の2階建、寄棟造、椽瓦葺で、屋根上に五角形平面で金属板葺の火の見を配する。規模は正面間口約5.8m、奥行約7.5mである。

・建築年代

西洋館は10代目今井孫市が明治時代中期から開始した主屋及び新座敷の改造に併せ、明治25(1892)年から明治28(1895)年頃に行なった建築と伝承される。

・復原考察

新西洋館は建築以来、平面に大きな変化はない。但し、昭和32(1957)年から翌年にかけて、1階の応接室を和風に改変した。また、昭和36(1961)年には第二室戸台風により火の見とした屋上の柵や、窓の外扉が破損するなどの被害を受けたため、火の見櫓の屋上へ上がる出入口を塞ぎ、外扉は1階応接室の1基を除いて取り替えたという。

2-4 旧今井銀行店舗

・概要

旧今井銀行店舗は煉瓦造、一部鉄筋コンクリート造3階建で、規模は正面間口7.9m、奥行15.0mとなる。建物は吉田の町を南北に横断する県道に東面し、公道には南側から西洋館、主屋、旧今井銀行店舗が建つ。

・建築年代

旧今井銀行店舗の建築年代は、国登録における所見では大正9(1920)年の建築とする。しかし、旧今井銀行店舗の新築・移転を伝える大正3(1914)年9月16日付『新潟東北日報』は

●今井銀行新築移転 西蒲原郡吉田村今井銀行にては一昨年十一月以来宏壮なる行舎新築中なりしところ去月竣工し去る十三日移転開業し得意先其他へ紀念品を頒たる

とある。このため、竣工は大正3(1914)年8月で、移転開業は大正3(1914)年9月13日とすることができる。

・復原考察

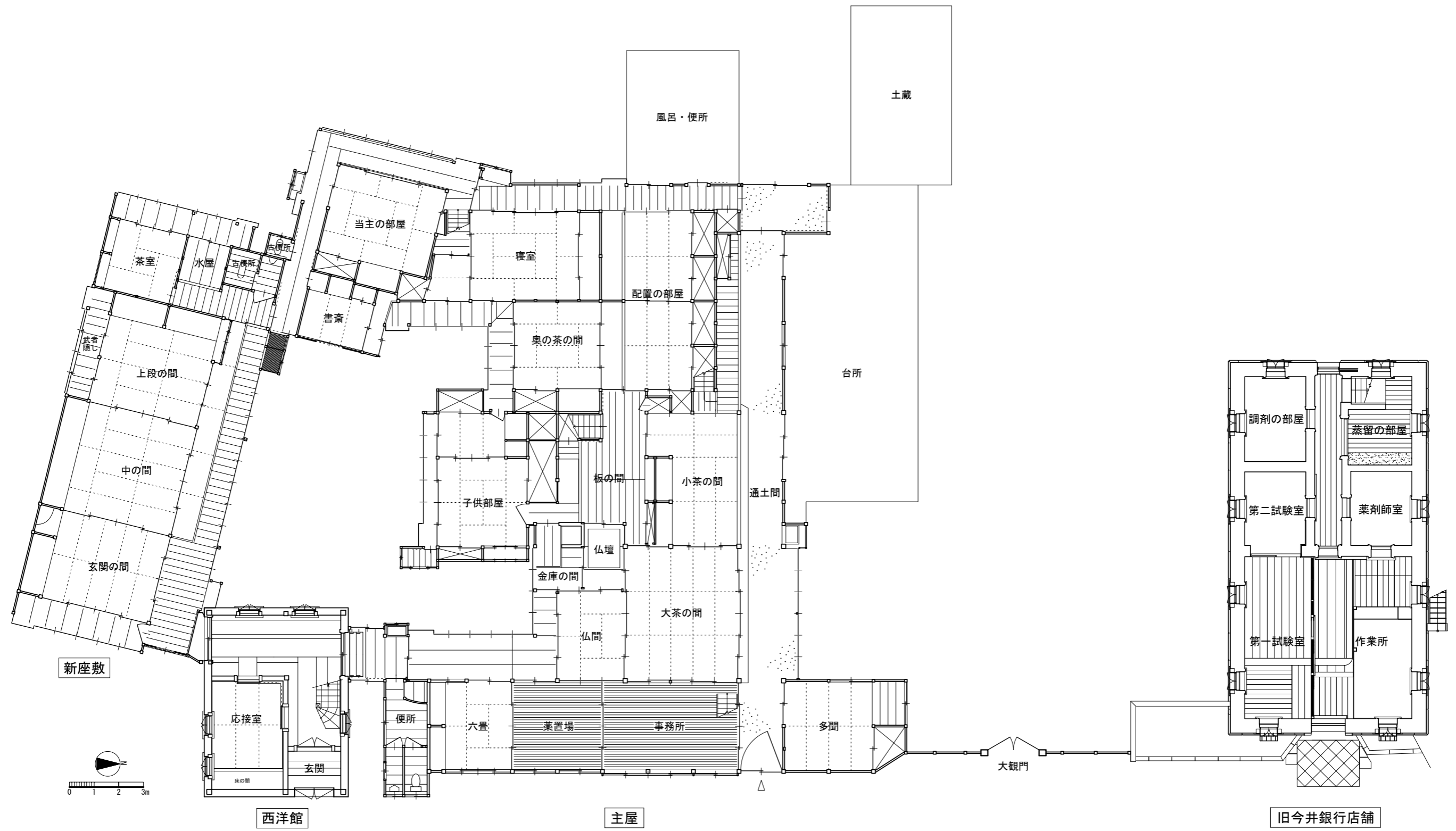
旧今井銀行店舗は大正15(1926)年に改修を受けた記録が今井家に残る。なお、今井銀行は昭和7(1932)年になって合併閉店となり、戦後は病院、製菓工場として使われ、内部が大きく改造を受け、現状の平面になった。

3. さいごに

このように、今井家住宅では今井家では、近世に築いた主屋を、新座敷、土蔵群を骨格として、敷地を拡大させて表通りに面して主屋、西洋館、旧今井銀行店舗を建て連ねたことが明らかとなった。

また、今井家は戦後における農地開放に際しては、商業資本家として製菓業を興し、既存の旧今井銀行店舗、土蔵群を活用することで乗り越えてきた。

このように今井家住宅の建物群は、江戸時代後期以後、近代、戦後を通して在郷町における商家一産業資本家としての営みを、建築群として表現するものと言える。加えて、それらの多くが悉く現存する点において、極めて貴重とすることができる。



今井家住宅 主屋・新座敷・西洋館・旧今井銀行店舗 平面図



主屋 外観 南東より（田村 収撮影）



主屋 大茶の間 南東より（田村 収撮影）



新座敷 外観 南東より（田村 収撮影）



新座敷 上段の間 北東より（田村 収撮影）



西洋館 外観 南東より (田村 収撮影)



西洋館 1階応接室 西より (田村 収撮影)



西洋館 2階応接室 北西より (田村 収撮影)



旧今井銀行店舗 外観 東より (田村 収撮影)



旧今井銀行店舗 1階 旧営業室 西より



旧今井銀行店舗 3階大講堂 北西より (田村 収撮影)



旧今井銀行店舗 外観 北より (田村 収撮影)

プロジェクト名：

三条市指定有形文化財八木神社本殿・拝殿・幣殿保存活用計画調査等業務

連携先：三条市教育委員会

受託期間：令和7年3月14日～令和7年3月31日

プロジェクト主査：平山 育男（学長）

プロジェクトメンバー：西澤 哉子

1. はじめに

新潟県三条市より、三条市北五百川^{きたいもかわ}に所在する三条市指定有形文化財である「八木神社本殿・拝殿・幣殿」について、保存活用計画調査等について依頼を受けた。

八木神社の社殿は三条市指定文化財とされ、昭和60(1985)年には新潟県教育委員会により実施された近世社寺建築調査において調査対象となって平面図などの作成がなされた。

今回の調査は、これまでの調査における成果を再確認するとともに、各建造物の建築的特色や時代の変遷等を調査・考察し、保存活用計画作成について基礎資料とするものである。各調査では、沿革・構造・規模・形式・建築年代・後世の改変と復元的考察を基本とするものであった。

以下、調査によって明らかとなった本殿、本殿覆堂^{さやどう}、拝殿、幣殿の建築年代、建築後の変遷などを中心に報告を行う。

2. 建築調査で明らかとなった事項

八木ヶ鼻は信濃川の支流となる守門川と五十嵐川の合流地の袂に位置する180mの高さに及ぶ絶壁である。これは700万年前における海底火山の活動により海底において溶岩ドームが形成されたものが、200万年前以後になって海底隆起などの活動により隆起し、その後の侵食などを受けたことにより現在の形になったと考えられている。

八木神社は、この八木ヶ鼻の山頂に鎮座したと伝わるが、現在はその麓となる三条市北五百川を境内地とする。勧請は大同2(807)年と伝承される。

八木神社の社地は、三条市の中心市街地からであると国道286号を進み、五十嵐川に架かる八木橋を渡った、五十嵐川に右岸を通る市道に南面するものである。境内入口には石祠と石標を配し、少し進むと文政4(1821)年建築の鳥居が建つ。社叢に囲まれた上り坂の参道を進むと、参道東側に「神恵泉碑」、更に進むと西側に湧水を引いた手水舎がある。階段を登ると東側に不動堂、西側に神明子安社と舞堂が配され、正面に拝殿、幣殿、本殿、本殿覆堂を仰ぐことができる。

2-1 本殿

・概要

本殿は木造の二間社流造世棚造の形式で、屋根は流し板葺とする。規模は間口7.49尺(2.27m)、身舎の奥行となる梁間は1間で4.20尺(1.27m)、向拝の出は3.30尺(1.00m)となる。

・建築年代

本殿の建築年代は従来、神社では寛延3(1750)年にまとめられた『年代記』において

本社 式坪 但万治元年

の記載に基づき、江戸時代前期の万治元(1658)年の建築を案内書などにおいて記している。また、昭和60(1985)年に実施された新潟県の近世社寺調査に際しては、この記載と本殿に残される虹梁における彫刻絵様の傾向から、この頃のものだと判断している。

今回の調査においては、これに修正を来す資料などは見出されなかったため、万治元(1658)年頃、17世紀中期の建築とする判断を妥当と考える。

・復原考察

身舎正面の扉は現状では板唐戸とする。これは既に『新潟県の近世社寺 新潟県近世社寺建築緊急調査報告書』において指摘があるように、中古の改変と判断できる。

屋根は板葺で、現状では不朽が著しいものの、直接の雨漏りなどは確認できない。これは、極めて早い段階から覆屋などを本殿が持ち、建物が保護されたためと判断することができる。



八木神社 本殿 外観 南より



八木神社 本殿 外観 南西より



八木神社 本殿 側面妻飾
東より



八木神社 本殿 屋根
南西より



八木神社 本殿 向拝虹梁
南より



八木神社 本殿覆堂 外観 南西より



八木神社 本殿覆堂 外観 北東より



八木神社 本殿 覆堂 小屋組 南西より



八木神社 本殿 覆堂 小屋組 北西より



八木神社 拜殿 外観
東より



八木神社 拜殿 内部
南より



八木神社 拜殿向拝 つなぎ虹梁
西より

2-2 本殿覆堂

・概要

本殿覆堂は木造平屋建、切妻造平入りの形式で、現在は金属板葺となる。規模は正面桁行が 17.94 尺 (5.44m)、奥行の梁間は 3 間で 15.50 尺 (4.70m) となる。

・建築年代

建物から建築年代を示す資料は見出されなかった。また、昭和 60(1985)年に実施された新潟県における近世社寺調査に際し覆堂の建築年代に言及はない。

今回の調査では、梁組、小屋組材を確認したところ材はある程度の風蝕を有し、毛筆で記された番付を小屋組の小屋束、貫などから確認した。毛筆の番付から、覆堂の建築年代は江戸時代後期に遡り、後述する幣殿と一体の構造であったと判断できる。

・復原考察

聞き取りによると覆堂の基礎は平成 16(2004)年の中越地震後、現状の形式に改められ、外壁も同時期に縦板に目板張とする現状の形式に改められた。床は、現状では板張であるが材は新しく、当初は叩き土間と判断できる。壁面の壁板はいずれも最近の材を用いている。屋根は現状では金属板葺であるが、小屋組は当初の扱首組で、勾配が矩勾配を越えるものであることなどから、当初の屋根形式は茅葺と判断できる。

2-3 拝殿・幣殿

・概要

拝殿は入母屋平入で正面に向拝、背面両脇には下屋で部屋を設け、屋根は金属板葺とする。幣殿は両流れ造の金属板葺となる。

規模は拝殿が正面 4 間、奥行 3 間半で、正面に向拝を設ける。幣殿は拝殿の背面に接続し、間口 2 間、奥行 3 間で、奥に間口 2 間、奥行 1 間半の長床が続く。

・建築年代

昭和 60(1985)年に実施された新潟県における近世社寺建築調査において、八木神社拝殿の建築年代については『新潟県の近世社寺 一新潟県近世社寺建築緊急調査報告書一』において

拝殿は 19 世紀初期頃の建築で、縁回りは昭和 15 年に取替えられている

とするものの根拠は示されない。現在、神社では拝殿の建築年代を配付資料において、明和 5(1768)年とする。拝殿に

彫られた彫刻絵様を見ると、19 世紀初期頃よりは 18 世紀後期、つまり、明和 5(1768)年の建築年代の方が妥当と考えることができる。

幣殿は、『新潟県の近世社寺 一新潟県近世社寺建築緊急調査報告書一』では

幣殿及び覆殿は明治 11 年に改築された

とするが根拠は示されない。神社には安永 4(1775)年の銘を持つ「長床」についての祈祷札と、明治 11(1878)年の銘を持つ「八木神社中床再建」とする棟札が残る。建物は風蝕などから、明治 11(1878)年とするのが妥当である。

長床は聞き取りで昭和 30(1955)年頃の建築とする。

・復原考察

拝殿背面両脇の小部屋は、拝殿側の壁に風蝕があることから、当初、これらの部屋はなく、中古の改造により設けられたことは明らかである。

拝殿、幣殿、長床と本殿覆堂は、平成 13(2001)年に屋根が現在見る金属板に改められたことが、神社に残る棟札の記載から明らかである。

3. さいごに

八木神社本殿は、八木大明神、守門大明神の二神を古くから祀るため、二間社として、地域においても珍しい平面形式を持ち貴重である。本殿覆堂は江戸時代後期以来の形式を持つ。建物は拝殿、幣殿を含め、地域の信仰に基づいた独自の平面形式を有しており、中世以来の古式よく示す建築と判断することができ、今後の保存が望まれる。

プロジェクト名：

長岡商工会議所 2025 カレンダーデザイン

連携先：長岡商工会議所

実施期間：令和6年9月4日～令和7年3月31日

プロジェクト主査：金 峯 洙（デザイン学科 准教授）

1. はじめに

本共同研究は、長岡商工会議所と長岡造形大学が連携し、「長岡の魅力発信」をテーマに2025年のカレンダーデザインを共同で制作したものである。長岡商工会議所とのカレンダーデザインにおける共同制作は今回が初めてであり、筆者が担当を務めた。今回のカレンダーでは、長岡市を象徴する地域である「醸造の町・摂田屋」をモチーフとした。

2. 研究の目的

本プロジェクトは、産学連携の一環として、地域の魅力をデザイン力で発信し、会員企業および地域社会との新たな関係構築を図ることを目的としている。特に、長岡市の文化資源である摂田屋地区に焦点を当て、その魅力を視覚化することで、デザインを通じた地域ブランディングを目指した。

3. 実施内容

2024年9月から11月にかけて、カレンダー制作に向けたリサーチ、デザイン提案、ビジュアル制作を段階的に実施した。地域の歴史的建造物や文化的象徴を調査・分析し、それらを取り入れたビジュアル表現の検討を行った。

主なスケジュール：

9月：テーマ検討、素材選定、イラスト案制作

10月：ビジュアル案完成、デザイン調整、最終データ納品

11月：印刷会社へ入稿、色校正、印刷開始

4. カレンダーの概要とコンセプト

2025年度カレンダーのタイトルは「Settaya Brewery Town」。長岡市の摂田屋地区を題材に、地域の文化や歴史を感じられるビジュアルに仕上げた。特に、摂田屋にある6つの醸造元の家印や樽、長岡市の市花「ツツジ」、旧機那サフラン酒製造本舗の鍍絵に描かれた神獣などをモチーフとして取り入れ、会員企業の繁栄と地域の伝統文化への敬意を表現した。

5. デザイン表現について

本作では、朝鮮民画の一種である「文字図」の手法を用い、摂田屋の「摂」の文字を縁起物としてデザイン化した。文字図とは、祝い事や吉祥を願って描かれる民画の一形式であり、今回はこの形式を現代的に再解釈し、地域文化を祝う意味を

込めている。

また、摂田屋地区にある6つの醸造元の伝統的な家印を積極的に活用した。家印は筆者の専門分野であり、特に過去に摂田屋地区の家印に関する研究に取り組んだ経験があることから、その知識と経験を十分に活かすことができた。

ただし、「越のむらさき」の家印については、同社の事情により、カレンダーでの使用許可を得ることができなかった。そこで、同社のシンボルの一つである「道しるべ地蔵」をモチーフに、新たに家印を制作することとした。

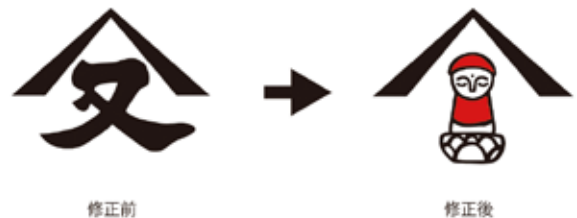


図1. 家印の修正（越のむらさき）

6. 成果物に関する知的財産・著作権等

本共同研究によって制作された成果物（グラフィック、著作物等）に関する著作権および知的財産権は、原則として長岡商工会議所に帰属する。研究成果の公表については、相互の協議の上で対応することとした。

7. 成果と今後

本カレンダーは2024年11月に3,000部印刷され、長岡商工会議所の会員約2,600社に、直接または郵送にて配布された。残りの約400部は、長岡商工会議所の新年会および山本五十六記念館にて配布されることとなった。

今回の共同研究は、地域資源を活用したビジュアルコミュニケーションを実践する貴重な機会となり、長岡地域の魅力を効果的に発信するデザイン成果物を生み出すことができた。また、実社会との連携を通じて、大学におけるデザイン教育・研究の社会的実践にも寄与するものとなった。

本カレンダーは、従来の山本五十六の書や長岡花火を用いたカレンダーとは異なるアプローチにより、より地域に根差した文化的表現が高く評価された。

一度限りの取り組みにとどめず、今後も長岡商工会議所と長岡造形大学との連携を継続し、地域デザインによる価値創造をさらに深めていく予定である。

※所属等はプロジェクト当時のもの

プロジェクト名：

廃ガラスを利用した就労支援（造形活動）と成果物の商品化に向けた研究

連携先：株式会社リリック

実施期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

プロジェクト主査：中村 和宏（美術・工芸学科 教授）

プロジェクトメンバー：小飯田 亜海

1. 研究目的

ガラスをより安全に造形活動に取り入れる方法を研究することにより、ガラスという素材の持つさらなる可能性を追求するとともに、社会におけるガラス工芸の活躍の場を広げる。研究には廃棄されるガラスを再利用する。本来廃棄される予定だったガラスに新しく付加価値を与えるアップサイクル（創造的再利用）を行う。

最終的には就労支援施設で廃ガラスの回収から材料作り、製品製造、販売を行うことを目標とし、研究を行う。

2. 共同研究の概要

本研究は2021年から現在に至るまで、株式会社リリックと連携し、ガラスの活用案を検討・開発・実装まで多年度に渡る計画として行う共同プロジェクトである。

新潟県村上市に拠点をもち、障がい者への総合的な支援を行う株式会社リリックでは、その事業の一環として「就労継続支援B型オリーブの樹」という施設で、障がいのある方を対象とした就労支援が行われている。

2021年から2023年にかけての研究では、廃ガラスを用いた造形素材の開発と、その素材によって作ることでできるガラス製品の提案を行った。

2024年からは実際に福祉現場でガラスの製品製造の導入を行なった。村上市の環境や福祉支援で求められる形態に合わせて素材や手順のブラッシュアップを行い、障がいのある利用者でも安全に行える製品づくりを就労支援の一環として行えるよう研究を発展させた。

用いるガラスは実際に村上市の生活の中で不要となった、廃棄されるガラスを回収して使用する。新潟県村上市では月に1度の不燃物回収と空き瓶回収でしかガラスの処分が行えず、週ごとに捨てられるガラスの種類が異なっているなど処分の際のルールも複雑である。そのため村上市に住む人にとって、ガラスの廃棄はハードルが高い。福祉施設ではこれらのガラスを回収し、材料作りから加工・製造に至るまでのすべての工程を、就労支援を必要とする利用者の力で行う。ガラスを通して社会との関わりを深める新しい就学就労のカタチとして、製品を作り上げていく。

長岡造形大学と株式会社リリックとの共同研究によって作られた新たな地場の民藝品となるようなアップサイクル製品として展開を行っていく。

3. 実施状況

本年度は就労支援施設内における製品製造の定着と、製品の流通に関する研究の2つを主軸に行った。

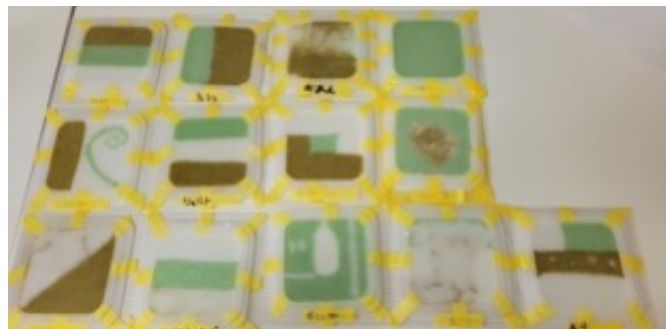
① 就労施設内における製品製造の定着

【1-1】障がいのある利用者の1人1人の特性に応じた制作方法の提案

就労支援を利用する方にはさまざまな特性がある。福祉支援を行う現場では、利用者の特性に応じた仕事、あるいは利用者のスキルアップにつながる仕事を提供することが求められる。そのため適正に応じて仕事の配分ができるよう、製造工程の細分化を行った。

- 当初は材料作りにおけるガラスを砕く、水砕などは怪我のリスクが高いため職員が行う予定でいたが、現在は電気炉から取り出す工程を除き利用者が行っている
- 利用者によって絵付けの際の模様が大きくなってしまったため模様付けを均一なデザインにするため型紙を導入した。型紙も複数用意し、利用者の特性に応じて使い分けを行っている。
- 手に刺さらない安全に使用できるガラスを用いているため、ガラスの計量はおたまやスプーンでの細かい調整が難しい方でも手などを使って量の調整ができる。利用者本人や職員の方で確認、修正がしやすいよう、ガラスやCMCは材料ごとにボウルを分けて計量を行なった。他にも利用者が工程を間違えた際にも対応できるよう手順・技法を変更し調整。

また、現時点の制作方法であらゆる利用者が制作できるかの確認を兼ねたワークショップを同会社内の放課後等デイサービス児童を対象に実施。思い思いのデザインで器を製作した。



※所属等はプロジェクト当時のもの

【1-2】村上市の環境や就労施設内のスケジュールに合わせた制作方法の変更

実際に村上市で回収したガラスを就労施設で材料にする過程で、そのため製造方法や作業に要する時間の見積もりにも変更が発生した。

- 電気炉の使用において、日中は同会社内の別事業所も営業するため、電力の使用が集中しブレーカーが落ちる傾向があった。そのため電気工事を行う2025年3月までは夜間に電気炉の使用を行った。
- 村上市で回収できるガラスの種類に応じて焼成温度や硬さに伴う粉碎時の粒子の大きさに違いが生じた。そのため適宜手順や電気炉の温度や調合比率を変更し対応した。

【1-3】制作していく過程で発生するトラブルの対応

ガラスの種類の違いや環境の違いによって前年度までの研究で発生しなかった不具合などが生じた。実際に製品作りを行う現場に毎週立ち会い、随時エラーに対応することで改善を行った。

- 型にガラスを詰め成形を行う過程で、離型の際にガラスが割れやすい傾向があった。型のわずかな凹凸や離型の際の負荷が割れにつながるため、使用する道具の見直し、ガラスを調合する際の手順のマニュアル化、マニュアルを利用者が覚えるまでの手順の見守りなどを行うことで対応をした。



また、複数のガラスや接着剤を混ぜて行う調合時に、加える水分量を多くしてしまうことで割れの原因に繋がっていた。接着剤として使用している CMC が水に浮き、ガラスが沈むため接着剤が均等に行き渡らなくなる。そのため水の量を調整し、粘度をあげることで対策をした。これにより、細かい粒子が浮上し不透明な模様となって製品に残るケースもなくなり、クオリティの向上に繋がった。



- 模様をつけるためのクリーム状のガラスが、型にガラスを詰める際に一部ガイドラインシートから剥がれるトラブルが発生。ラミネートシートの違いによる滑りの良さが分離の原因になっていると仮定し、シートにヤスリかけを行った。その後、模様が剥がれる事象の改善が確認された。



②製品の流通に関する研究

【2-1】商品の詳細決定及びパッケージの検討

製品となる器のデザイン及びパッケージデザインの提案を行う。製品の割れを防ぐため、箱の中で製品が動かないよう寸法をオーダーメイドした箱を使用。そのためパッケージのコストが高くなり、プレ販売時点では別売りでの販売を行っている。



また、製造状況に合わせて一部製品のラインナップの変更を行った。



【2-2】 プロモーション映像の撮影

2024年6月に株式会社リリック、株式会社酒のかどやにご協力いただき、ガラス製品のプロモーション映像の撮影を行った。

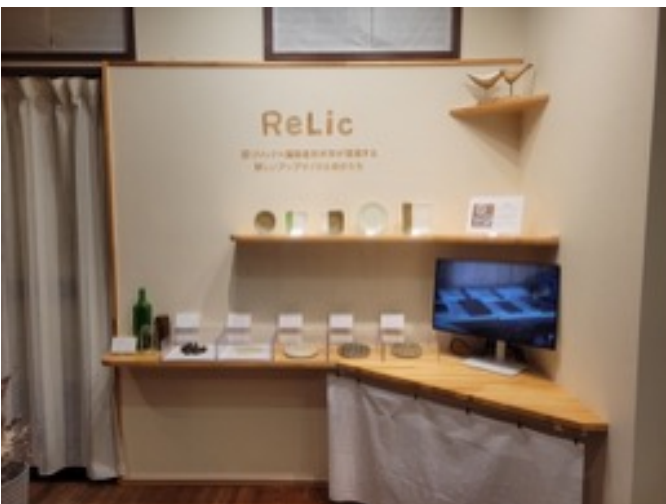


撮影した映像は展示販売時のプロモーション動画として使用している。

【2-3】 流通価格の設定、プレ販売

材料費、人件費を踏まえて製品の価格設定を行い、2箇所での商品のプレ販売を行なった。

- 株式会社リリック内で販売を行う事業所ムラメゾンでの展示、プレ販売を行った。商品購入時の傾向や客層、集客の多い時期など、今後の販売に必要なデータやお客様の声に関する情報を集めることに繋がった。



- 株式会社リリックとの姉妹企業である一般社団法人暮らしランプでのプレ販売として主に福祉事務所としてのイベントで委託として製品の取り扱いと都度情報を共有していただいた。

4. 来年度の方針

- 製品の量産

本年度は製品作り中に確認されたトラブルの対応や環境に左右され、想定以上に少ない製品の製造となった。本年度1年間のデータを踏まえ、来年度は製造効率の改善を行っていききたい

- 商品の効果的な周知の仕方の研究および商品価値の検証

商品の認知拡大および商品価値検証のため、展示会への出展を計画している。具体的には、9月に行われる東京ギフトショーへ出展する予定である。そこへ向けてリーフレット等の広告配布物、ECサイトの作成など、認知拡大に繋げるための環境を事前に整える。また、展示会会場のブースでの、効果的な商品の見せ方も追及する。このように、展示会への出展の効果を最大限高めることで、実際にどの程度周知へ繋がったか、確認したい。そして、バイヤーや消費者の生の反応が得られる展示会という場において、本研究によって生み出された商品へどのような反応が集まるのかりサーチしたい。

プロジェクト名：

共同研究：長岡市中心街地イルミネーション事業開発

連携先：長岡電気工事協同組合

実施期間：令和6年9月25日～令和7年3月31日

プロジェクト主査：水川 毅（デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：矢尾板 和宣

1. イルミネーションコンセプト企画

2024年度は、2023年度の参加者がイルミネーションを変化させることができる「カスタマイズイルミ」のコンセプトの評判が良かったため、それを継承し、「カスタマイズイルミ2」とした。

2. イルミネーションコントローラーデザイン

「カスタマイズイルミ」の時は、イルミネーションを可変させるイルミネーションコントローラー（イルコン）が1台だったが、「カスタマイズイルミ2」では、イルコンが2台あれば参加者も増えると考えて、2台のイルコンを用意した。



左記のイルコンを2台設置

3. イルミネーション実施期間

2024年11月15日（金）～2025年2月21日（金）

4. イルミネーション実施場所

大手通りアーケード下

5. 打ち合わせスケジュール

9月6日（金）14:00～ コンセプト確認

9月27日（金）10:00～ イルコンデザイン提案

10月24日（木）15:00～ ポスターデザイン提案、
設置・点灯スケジュール確認

11月14日（木）14:00～ 最終打合せ

6. イルミネーション告知ポスター



アルビレックスカラーとキャラクターを入り込んだデザインとなった。

7. 現地写真風景



※所属等はプロジェクト当時のもの

8. カスタマイズイルミ2 集客人数、その分析

カスタマイズイルミ2		操作人数カウント								
		16	17	18	19	20	21	22		
		時	時	時	時	時	時	時	時	日計
2024年	11月15日 金	12	19	4	7	8	18			68
	11月16日 土	5	19	7	11	6	16			64
	11月17日 日	6	7	5	4	4	2			28
	11月18日 月	13	6	5	3	6	6			39
	11月19日 火	2	5	6	7	2	3			25
	11月20日 水	4	8	1	8	1	9			31
	11月21日 木	5	12	2	4	3	4			30
	12月1日 日	7	19	12	5	11	1			55
	12月2日 月	4	4	8	4	6	2			26
	12月3日 火	5	5	7	4	4	0			25
	12月4日 水	9	4	5	4	5	0			27
	12月5日 木	11	8	2	1	0	4			26
	12月6日 金	9	1	5	5	3	3			26
	12月7日 土	3	15	6	10	6	0			40
2025年	1月1日 水	7	2	7	1	0	4			21
	1月2日 木	14	18	0	4	13	3			52
	1月3日 金	0	10	2	7	0	2			21
	1月4日 土	6	3	3	4	1	0			17
	1月5日 日	9	2	1	5	0	3			20
	1月6日 月	2	4	1	3	1	6			17
	1月7日 火	16	1	2	1	2	1			23
	2月1日 土	2	3	4	11	0	1			21
	2月2日 日	9	7	7	8	2	2			35
	2月3日 月	3	1	7	2	0	0			13
	2月4日 火	0	0	2	3	4	0			9
	2月5日 水	3	2	2	0	2	0			9
	2月6日 木	0	1	0	0	0	0			1
	2月7日 金	2	4	3	1	0	0			10
										779
		計 168	180	114	127	90	90			
		平均 6.8人	6.7人	4.8人	4.5人	3.2人	3.2人			
	曜日平均	月別日平均		1日平均						
	月	23.0人	11月	40.7人	27.8人					
	火	20.5人	12月	32.14人						
	水	22.0人	1月	24.4人			総点灯日数			
	木	27.3人	2月	14.0人			99日			
	金	31.25人					千名操作人数			
	土	35.5人					2752.2人			
	日	34.5人								

＊11月、12月、1月、2月の4カ月の任意の日にタッチパネル操作した人数を抽出し、各月の平均人数から1日平均人数を出し、それに全点灯日数99日を掛けた予想操作人数は2752.2人となった。

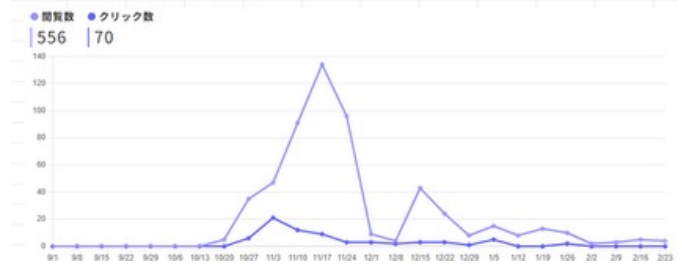
- 金、土、日の週末が平均30人越え → 週末の集客が多いことによる
- 点灯時間のピークは、17時～18時の6.7人 → 最も人が中心街に出ている時間帯ゆえ
- 月別の操作人数トップは11月の40.7人 → スタート時認知、新鮮度が高いため

9. リットリンク閲覧数、クリック数、その分析

<https://lit.link/customaizirumi2>



カスタマイズイルミ2 リットリンク閲覧数



11月のイルミネーション操作者数が多いことと連動して、11月のリットリンクの閲覧数、クリック数が共に多いことがわかった。カスタマイズイルミの告知を早めることで、認知度や初動の操作人数が上がる可能性があると思われる。

プロジェクト名：

長岡市 温室効果ガス排出量軽減啓発活動 ～ GLOBAL WARMING COLLECTION ～

連携先：長岡市

実施期間：令和6年7月16日～令和7年3月31日

プロジェクト主査：池田 享史（デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：根本 佳奈（視覚デザイン学科 4年）

1. 概要

地球温暖化 温室効果ガス排出軽減啓発を判りやすく伝える為に市民との接点が多くある、市内のEVバスを使って告知を行う事を中心にプロジェクトを進行した。

主要媒体は、バスラッピング、B3車内中吊り、DM（EVバスに乗車した方々のハンドアウト用）とし、たくさんの方々にリーチさせる事を目的としデザイン展開している。

2. グラフィックコンセプト

誰もが抱える問題に改めて意識を向けさせるには、まずは能動的に見たくなるようなアプローチが必要だと考えた。そこで、ターゲットと同年代の女性を被写体に招き、ファッションやコラージュ等を用い、女性向けファッション誌を思わせる可愛らしいビジュアルで、地球温暖化によって生じる問題を表現した。さらに、制作過程でも環境保全を意識し、本来ゴミとして捨てられるものを衣装にリメイクするなどの工夫をした。

3. ビジュアルデザイン

「長岡の街をランウェイに！EVバスを用いた地球温暖化ファッションショー」をイメージし、異常気象などの多種多様な地球温暖化問題を、モデルである一人の女性（地球の擬人化）が様々な表情を見せることで表現している。能動的に意識を向けてもらうため、可愛らしさと衝撃が共存したビジュアルを制作した。



4. 効果と反応

長岡市内を循環する中央環状線EVバスのラッピングとEVバスの車内をポスターで埋め尽くすという本プロジェクト「GLOBAL WARMING COLLECTION」は、たくさんの乗客に衝撃を与えた。環境啓発活動は国内で様々な取組が行われているが、どこか他人事で、なぜかピンとこないものがたくさんあるのも事実である。自分たちには関係無い、少し遠い話のような気がするからだ。GLOBAL WARMING COLLECTIONは地球をモチーフにしたモデルが登場し、一度見たら見返してしまうほどのアテンションであり、長岡新聞や、ヤフーニュースなど、メディアにも多数掲載され、長岡の注目を集めた。また、掲載期間中は米百俵プレイスマライエ長岡や、新潟県地球温暖化防止活動推進センター主催のアオーレ長岡を会場としたイベント「2050年までに温室効果ガス排出量実質ゼロ」（2025年1月13日開催）でも展示告知された。



※所属等はプロジェクト当時のもの

長岡新聞 第三種郵便物認可 第6629号 (2)

環境問題を啓発 造形大生の根本さんのデザイン EVバスにラッピング

環境問題を啓発し、EVバスにラッピングしたデザインを、造形大生根本さんがデザインした。デザインは、地球温暖化をテーマにしたもので、EVバスにラッピングされたデザインは、環境問題を啓発する効果がある。根本さんは、造形大生として、環境問題を啓発する活動に取り組んでいる。デザインは、地球温暖化をテーマにしたもので、EVバスにラッピングされたデザインは、環境問題を啓発する効果がある。根本さんは、造形大生として、環境問題を啓発する活動に取り組んでいる。

地球温暖化をテーマにしたデザインは、EVバスにラッピングされたデザインは、環境問題を啓発する効果がある。根本さんは、造形大生として、環境問題を啓発する活動に取り組んでいる。デザインは、地球温暖化をテーマにしたもので、EVバスにラッピングされたデザインは、環境問題を啓発する効果がある。根本さんは、造形大生として、環境問題を啓発する活動に取り組んでいる。

地球温暖化をテーマにしたデザインは、EVバスにラッピングされたデザインは、環境問題を啓発する効果がある。根本さんは、造形大生として、環境問題を啓発する活動に取り組んでいる。デザインは、地球温暖化をテーマにしたもので、EVバスにラッピングされたデザインは、環境問題を啓発する効果がある。根本さんは、造形大生として、環境問題を啓発する活動に取り組んでいる。



地球温暖化啓発プロジェクト GLOBAL WARMING COLLECTION

Concept

Process

地球温暖化とは?

長岡市



GLOBAL WARMING COLLECTION

おつとめ品 購入

ありがとうございます。

長岡市



プロジェクト名：

村上市伝統的建造物群保存地区関連業務

連携先：エヌシーイー株式会社

実施期間：令和6年6月7日～令和7年2月28日

プロジェクト主査：津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：平山 育男、西澤 哉子、大久保 未悠、越後村上古建築研究会（代表：小池昭雄）

1. はじめに

文化財保護法第143条に規定された伝統的建造物群保存地区の決定の可否を判断するための各種調査を実施し、伝統的建造物群保存対策調査報告書を作成する業務が、村上市生涯学習課よりエヌシーイー株式会社に委託された。我々は、その業務の一部を担当することとなり、その調査を実施し、報告書の一部を作成した。

村上市は、新潟県の最北端に位置している。現在の村上市は、平成20(2008)年に、村上市、荒川町、神林村、朝日村、山北町の5市町村が合併した市域である。その中で、村上城下町は、村上市の中心部に位置し、江戸時代初期、本格的な城郭の普請や城下町の整備によって、その骨格が築かれ発展してきた。武家町や町人町、寺町が形成されており、武家住宅や町家等の歴史的建造物が数多く残っている。

村上市は、平成2(1990)年、旧村上城下の武家町を対象に「伝統的建造物群保存対策調査」を行い、平成12(2000)年には「村上市歴史的景観保全条例」を施行し、町並み景観の保全に努めてきた。平成14(2002)年には、財団法人日本ナショナルトラストによる、旧村上城下の町人町、寺町内を対象区域に観光資源保護調査と称した、町家や町並み景観の詳細な調査が実施された。その後村上市は、平成25(2013)年に「村上市景観計画」を策定し、「旧武家町地区」「旧町人町・寺町地区」等を重点地区として、市民、事業者、行政の協働による景観づくりに取り組んでいる。そして、平成28(2016)年には「村上市歴史的風致維持向上計画」を策定し、「村上城下町区域」を重点区域として設定し、より一層歴史的建造物の保存活用や町並み景観の保全が進んでいる状況である。

こうした背景の中で、令和6(2024)年度これまでの調査等の蓄積を活用しながら旧町人町の保存対策調査を実施したものが本調査である。村上市が文化庁の補助を受け、旧村上城下の旧町人町を対象として実施する伝統的建造物群保存対策調査であり、旧町人町の伝統的な建造物の特性を把握し、現状での当該地区の歴史的価値を明らかにするとともに、歴史ある貴重な町並みの保存継承及び今後の活用やまちづくりに資する基礎資料の作成を目的とする。

なお、業務の履行にあたっては、伝統的建造物群保存地区制度の実務の手引き（令和3年3月文化庁発行）に基づき実施した。

2. 業務概要

以下の作業を行った。

○建築史調査

- 外観目視調査、個別調査物件の抽出の上、個別調査による建築特性の把握
- 個別調査物件所有者から聞き取り
- 個別調査(実地調査)の実施と報告書資料等の作成
- 建築史調査のとりまとめ・報告書作成

○保存活用対策案の作成

- 建造物の修理修景方針、基準等の作成
- 町並み保存のための対策案の作成
- 伝建審議会委員との意見交換

報告書の章立ては、以下の通りである。

第1章 調査の概要

第2章 村上城下町の概要

第3章 村上城下町の都市史的特色

第4章 旧町人町の建造物

第5章 旧町人町の町並み

第6章 旧町人町の暮らしとまちづくりの歩み

第7章 町並み保存と活用の方向性

このうち、第4章第1節「歴史的建造物の個別解説」第4章第2節「建造物の特性」および、第7章第2節「旧町人町の町並みの保存活用の方向性」の執筆・編集を担当した。

3. 建築史調査

1) 調査概要

個別調査対象は、村上城下町旧町人地のうち外観調査によって比較的改造が少ない村上町家を抽出し、その中で所有者から同意を得た物件とした。調査対象は、表1の通りであり、それぞれの対象物件の位置は、図1および図2に示す。伝統的な形式を継承しており、かつ比較的改造の少ない建造物がよく残っている庄内町を中心に抽出することとなった。ただし、現在も使用されている建造物は多くないため、平成14(2002)年度観光資源保護調査における旧町人町内の歴史的建造物の実測調査済物件からも再度調査を行ったものもある。

表1 個別調査対象物件一覧

番号	所在地 町名	建物名称	建物名(構造形式/建築年) 調査をした主要棟のみ
1	庄内町	I商店倉庫 (旧岩澤屋)	・主屋(木造2階建、桁行8.8m×梁間17.8m、南面下屋付、切妻造平入金属板葺/江戸後期) ・土蔵(土蔵造2階建、桁行10.7m×梁間5.2m、切妻造平入/江戸後期) ・味噌蔵(土蔵造、桁行3.2m×梁間5.2m、平入/江戸後期)
2	庄内町	K時計店 (S家住宅)	・主屋(木造2階建、桁行5.2m×梁間11.9m、南面下屋付、切妻造平入棧瓦葺/明治元(1868)年) ・土蔵(土蔵造2階建、桁行4.6m×梁間4.1m、南面下屋付、切妻造妻入/大正7(1918)年)
3	庄内町	旧Y家住宅	・主屋(木造2階建、桁行5.2m×梁間11.9m、北面下屋付、切妻造平入セメント瓦葺/安政3(1856)年)
4	庄内町	旧S家住宅	・主屋(木造2階建、桁行5.2m×梁間10.9m、北面下屋付、切妻造平入セメント瓦葺/明治元(1868)年)
5	庄内町	O板金南棟 (旧玩具店)	・主屋(木造2階建、桁行4.4m×梁間10.9m、西面下屋付、切妻造平入セメント瓦葺/明治元(1868)年)
6	庄内町	O板金北棟 (旧O家住宅)	・主屋(木造2階建、桁行4.6m×梁間8.3m、西面下屋付、切妻造平入セメント瓦葺/明治元(1868)年)
7	小町	W家住宅 (旧M家住宅)	・主屋(木造2階建、桁行5.1m×梁間14.6m、東面下屋付、切妻造平入棧瓦葺/明治15(1882)年)
8	庄内町	K家住宅 (旧M服店)	・主屋(木造2階建、桁行5.5m×梁間12.8m、北面下屋付、切妻造平入棧瓦葺/昭和9(1934)年)
9	肴町	H家住宅	・主屋(木造2階建、桁行4.7m×梁間13.8m、北面下屋付、切妻造平入セメント瓦葺/明治36(1903)年)
10	肴町	旧M家住宅	・主屋(木造2階建、桁行4.5m×梁間13.7m、南面下屋付、切妻造平入棧瓦葺/昭和9(1934)年)
11	肴町	旧O印章堂 (旧O家住宅)	・主屋(木造2階建、桁行3.6m×梁間10.0m、切妻造平入棧瓦葺/昭和23(1948)年)

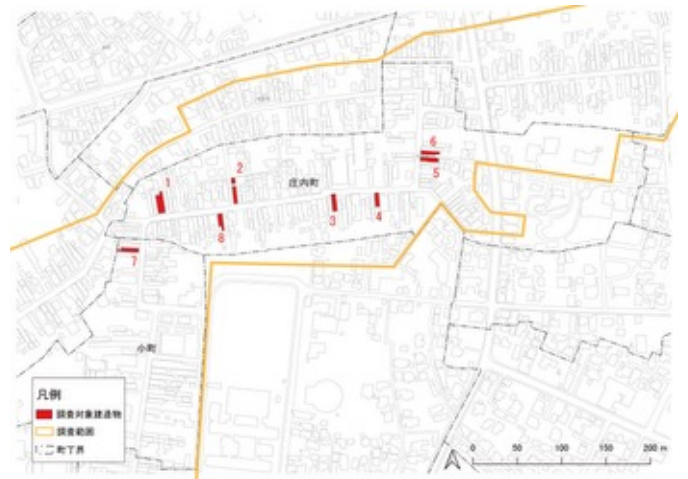


図2 調査建造物の位置(庄内町・小町の拡大図)

2) 個別調査解説

建物個別調査では、前記した町家で所有者から同意を得た10件14棟の物件について調査した。調査は4日間(令和6(2024)年10月19日、26日、11月10日、17日)かけて「越後村上古建築研究会」の協力を得て1棟6人体制で実施した。

個別調査を行ったそれぞれの物件の敷地内には、主屋をはじめ複数棟が連なっている。主屋は町家建築であり、敷地の奥には便所、浴室を中心とした水廻りを附属棟としているものが多い。これら附属棟は、伝統的形式を残していないことが多いため、構造形式等の詳しい言及を省いた。この地域は共同井戸のようなものはなく、上水はかつて敷地内から各戸で供給していたようであるが、その後普及する公共上下水に接続する際に設備を入れ替え、棟ごと改変することも多い。生活の場として継続使用しているため、いちばん改変が多い部分である。

個別解説では各棟の建築年代とその根拠を示す。固定資産台帳の記載を参考にした。その他の直接資料は乏しく、多くは現在の所有者の聞き取りによったが、代替わりや所有者の変遷により、明確な根拠が見出しづらいものも少なくない。そのなかでは、棟札が発見された物件や、箱階段建具裏に年号が示されている物件はその信憑性が高いと判断した。

図面は、各階平面図(一部配置図を含む)と通りに面した正面の立面図、長手方向の断面図を示した。木造2階建であり、桁行は2階の間口の両端の柱芯間の距離、梁間は2階の前後の軒桁の通り芯間の距離をメートル表記(小数点第2位四捨五入)で示した。図面に示した室名は、各物件で呼称の相違はあったが、2階は以下のように統一した。2階の



図1 調査建造物の位置(広域) ※拡大図範囲は図2

平面では、正面にある部分を「表二階」、その奥の「吹抜け」を挟み、さらに奥にある部分を「裏二階」とした。2階が吹抜けとなっている1階の中心的な部屋を「茶の間」とし、正面1階を「見世」とした。

写真は正面の外観はすべて掲載した。主屋内部は吹抜けを持つ茶の間が特徴的であるため、内部は茶の間を中心に掲載した。その他年代判定の根拠となる棟札も掲載した。図3のように見開きでレイアウトした。

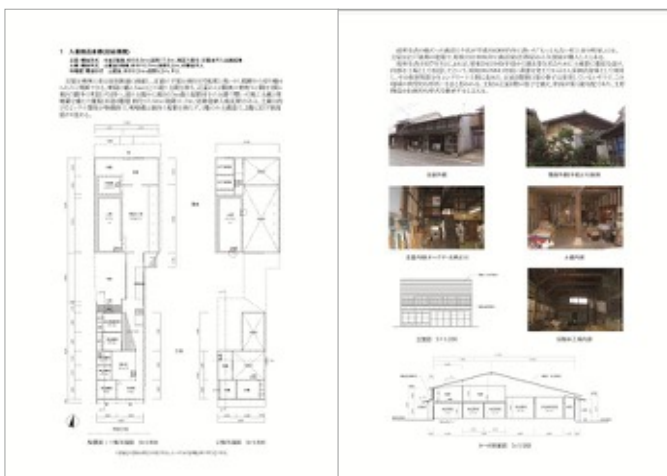


図3 第4章第2節のレイアウト（I商店倉庫）

4. 保存活用対策案の作成

この内容に関しては、第7章第2節「旧町人町の町並みの保存活用の方向性」にまとめた。以下に転載する。

旧町人町の町並みの保存活用の方向性

村上城下町における旧町人町の町並みを保存するため、伝統的建造物保存地区を指定する場合の基本的考え方をまとめる。

伝統的建造物群を保存するためには、伝統的建造物群を含むエリアを、「保存地区」として都市計画決定する。当該保存地区内において歴史的町並みを構成する「伝統的建造物」は、旧町人町が成立した藩政期に建築され現存する町家建築に加え、旧町人町が近代都市に移行する明治から昭和30年頃に建造された町家建築等も伝統的な特性（木造2階建切妻造平入正面下屋付、間口いっぱい開口を設ける、隣棟間の棟の位置をずらす）を継承していることから「伝統的建造物」に該当する。これらの町家建築や同時代に町並みを構成した近代建築等を「伝統的建造物」に指定し保存することが望ましい。さらに「伝統的建造物」と一体をなす「環境物件」を指定する。その他の非伝統的な形態意匠の建物（非伝統的建造物）については、「修景基準（望ましい修景の基準）」「許

可基準（新築等（増築、改築、移転または修繕、模様替えもしくは色彩の変更）に対して最低限満たすべき基準）」等を定め、歴史的風致の維持、または回復していくことによって、より旧町人町の魅力が顕在化する。

(1) 保存地区設定の考え方

村上城下町における旧町人町の範囲は図4に示す、羽黒町、長井町、上町、大町、細工町、大工町、安良町、小国町、寺町、小町、庄内町、久保多町、片町、上片町、加賀町、塩町、鍛冶町、肴町である。

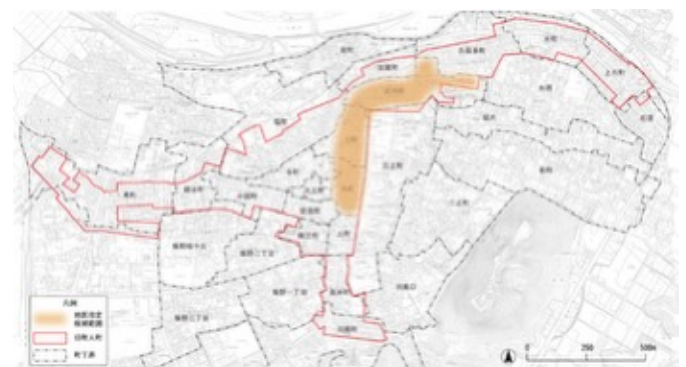


図4 伝建地区指定候補範囲

「旧町人町」全域に伝統的な建造物が保存されており、なるべく一体的に保存地区とすることが理想である。しかし、その中で伝統的建造物が群としてよく残り、かつ伝統的な地割りがよく旧態を保持している範囲が、より高い範囲と考え、まずその範囲を伝統的建造物群保存地区に設定すべきと考える。さらに「村上まつり」の際のおしゃぎりの巡行ルートに隣接する建造物群は、しつらえの特性も含めて文化財的に価値が高い範囲ともいえる。

今回の保存対策調査では、村上城下町旧町人町のうち、庄内町、小町及び大町地内の出羽街道沿線の範囲がこれに該当することが明らかとなった。庄内町の出羽街道沿いは伝統的な地割りがよく旧態を保持しており、伝統的な特性をよく残すとともに、外観上大きな改造が行われていない切妻平入の町家建築が建ち並ぶ。小町及び大町は伝統的な町家建築の特性を継承した既往の制度による歴史的環境整備が進み、町内に歴史的景観を維持向上する意識が根付いている。

(2) 伝統的建造物の特定の考え方

保存地区内で歴史的町並みを構成する「伝統的建造物」は、主として近世由来の町家建築であるが、村上城下町の旧町人町の町家建築は明治以降にも、伝統を大きく変えずに引きつ

がれた。近代化とともにその形態等を少しずつ変容させながらも、切妻平入正面下屋付であること、通りに面する間口いっぱい開口を開くこと、隣棟間の棟の位置をずらして配置することなどの伝統的な建築形式は、維持継承されてきた。さらに地割りは継承している条件下での建造物であり、藩政期をベースとして近代都市に変貌を遂げていく村上旧町人町の重層的な変遷の過程を示す「伝統的建造物」を残すと言える。具体的には土蔵建築、木造2階建程度の近代和風建築や和洋折衷建築（擬洋風建築・看板建築）、鉄筋コンクリート造の近代洋風建築である。そのため、これらの町家建築と近代建築が特定物件の候補である。

工作物に関しては、伝統的建造物と一体をなすもので、概ね昭和30年代までに造られ、伝統的な構法によってその特性をよく表していると認められる塀などが候補となる。

(3) 修理、修景、許可の基準

伝統的建造物の修理は、通常望見できる意匠・形態、構造形式等は復原及び現状維持が原則である。しかし、現在も住宅等として活用されていることから修理を行う際は、十分な履歴調査をしたうえで、今日的な住環境の確保や耐震性などの機能・性能の向上を図りながら、伝統的建造物群の特性に応じた保存修理を行う必要がある。旧町人町における伝統的建造物は、使い続けていく過程で既に手が入っている物件も多い。そこで、調査により判明した旧態に復原することで伝統的建造物としての価値が高まる保存修理も考えられる。これらの行為を修理基準で定める。

その他の建造物の新築や伝統的建造物以外の建造物を改修する場合は、切妻平入形式や隣棟間の棟の位置の保持などの歴史的町並みの特性に合致するように、修景を行うことが望ましい。そのため修景基準を定め誘導する。

上記の修理、修景及び最低限歴史的風致を阻害しないための許可の基準を定める際には、村上市景観計画に定める「景観形成基準」との整合性を図る必要がある。

なお、前節で挙げた課題に、町並みに調和しない現代建築が町並みを阻害していることを示した。その例として、前面道路から後退して配置された建物や、非木造、3階建て以上の建物、豎屋で配置された建物、道路に面する建物正面の開口幅が狭められ、防火サイディングで仕上げられた耐力壁が設置された建物、伝統的建造物の意匠（色彩）と異なった建物等を挙げた。さらに空き家の所有者・管理者の変更による用途変更・改修や、空き地に新築等が行われる場合も想定さ

れる。こうした行為が、その他の建造物の新築等に当たる。

(4) 伝建地区指定とあわせた既往諸計画の見直し

伝建地区の指定とあわせて、保存活用計画を策定する必要がある。保存計画、整備計画、防災計画等を決める際に、他の既往諸計画の見直しが生じる。

現状の都市計画による旧町人町の用途地域により、特に商業系地域であれば、法規上建築可能な規模に準じた開発圧力が潜在的にあるため、将来的に所有者・管理者側の要求が伝建地区指定により不可能になる場合がある。また、旧町人地の大部分は準防火地域であり、既存不適格建築物も多く存在する。これらの建築物の新築等にあたり現状の構造・形態を保持しようとした場合、建築基準法に抵触するおそれがある。そのため、都市計画の見直しや建築基準法の規制緩和のための条例等の整備も検討・導入の必要もある。

さらに、景観計画との整合を図り、現行基準と矛盾のないように既往制度の見直しもせねばならない。

伝建地区の指定を目指すにあたり、歴史的な地域資源が持続的に継承される仕組みづくりを多方面から検討することが重要である。一方で、過度な抑制により活力が低下しないよう注意も必要である。

5. さいごに

指導・助言をいただいた文化庁文化財第二課伝統的建造物群部門の梅津章子主任文化財調査官、委託いただいた村上市生涯学習課文化行政推進室の田中俊行係長ならびにエヌシーイー株式会社都市・地域計画部木野勢雄也グループ長と山賀和真氏には、謝意を表したい。なかなか厳しい条件での業務であり、やり残しも少なくない。今後も村上市のまちづくりに引き続き協力できる状況を作りたいが、受託体制の整備が課題だと思っている。

知的財産の管理・活用

長岡造形大学では教職員や学生が創出した知的財産を保護・管理・活用する活動に取り組んでいます。

教員主体のデザイン研究開発、地域協創演習といった地域の課題解決に学生が取り組む授業などで知的財産が創出されるケースがあります。いずれも創出された知的財産を大学が適切に管理し、商品化して販売するようなケースでは利活用について契約の締結を行っています。

fragment (アロマディフューザー)

小型で瓶型のアロマディフューザー。様々な色のアクリル板を積層させて削ることで、アクリルのカラフルな素材としての魅力を引き出した。アクリル、アルミニウム、木材と合わせることで素材のコントラストで高級感を出している。インテリア製品として、一輪挿しの花瓶としても使用出来る。

平成 29 年度意匠権取得



AROMAROID (アロमारロイド)

スピーカー / 照明一体型卓上匂いセンサー

株式会社アロマビット、山形大学、本学が、「ニオイ可視化センサー（アロマビット提供）搭載家電」をテーマに、デザインコンセプトモデル「AROMAROID」を開発。3D プリンティングのポテンシャルを最大限に引き出す為に、コンピュータプログラムによってデザインを生成する Generative Design (生成的デザイン) を採用した。金型成型では作り得ない、3D プリンティングならではの複雑かつ優美で抽象彫刻のように鑑賞に耐える造形を持った家電製品を目指した。

令和 3 年度意匠権取得



時計

時を表示する時表示体と、分を表示する分表示体とが交差状態に設けられ、それぞれが交差している部位で時と分が表示される、カタチの変化により時間を表現する時計。

平成 28 年度意匠権取得・令和元年度特許権取得



地域協創演習

地域協創演習は、地域社会及び企業と本学教員・学生が互いに協力し、新たな知的価値、地域価値、企業価値の創出を目指す演習授業です。

学生との協創を希望する地域や企業の方からの相談を受け、学生にとって教育効果が高いと判断した場合に授業として対応しています。授業内で教員による指導のもと、学生がデザインを通して様々な課題解決や新たな価値創造に取り組んでいます。

プロジェクト名：

日本精機と考える新しい生活スタイル

実施期間：令和7年8月～令和7年9月

担当教員：真壁 友（デザイン学科 教授）、平原 真（デザイン学科 准教授）

履修者数：4人

授業の概要及びテーマ

「CO2センサーの第2弾を作ろう！」

日本精機の民生向け商品、CO2センサーの第2弾となるような商品提案を行う。センサー技術、可視化技術を使い生活を便利にするデザインの提案を行う。

実施スケジュール

8月

ガイダンス、観察スケッチ、ワークショップ

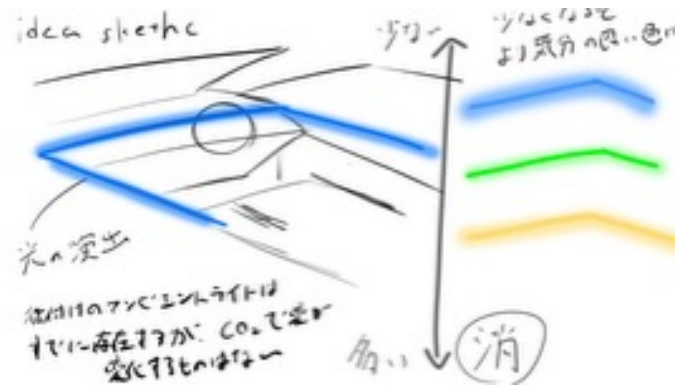
電子回路入門ワークショップ、アイデア展開ワークショップ

9月

プレゼンテーション、工場見学

実施状況及び成果

この演習の中では完成品を目指すのではなくプロトタイプをして完成品のイメージを共有しながらデザイン案をブラッシュアップする手法を学ぶ。そのために観察スケッチ、電子回路の入門としてM5 Stackを使ったプロトタイプについて学んだ。グループワークでのアイデアブラッシュアップを経て各自でプレゼンテーション、モックアップの作成を行った。



所感、今後の展望 など

他授業との兼ね合いで夏休み期間中に集中講義での開催となった。日本精機からも授業に若手社員が参加し普段の授業とは異なる環境での意見交換も行えた。M5 Stackといった普段の授業では使わない技術に触れる機会ともなった。短期間でアイデアからプロトタイプまで行う内容になったが、良い面と悪い面がある。良い面としては短期間でプレゼンテーションまで持っていくという瞬発力のトレーニングとなったことである。悪い面としてはじっくり考えて取り組むといった事ができなくなっていた。

エチレンガスとは

果物や植物が出す植物ホルモンの一種
自らの成長を促進させる、熟成を促す働きをする
温度を下げたり酸素濃度を下げることで呼吸が減り、発生を抑制できる

世の中にエチレンガスを測る機器はあるもの...

高価で一般家庭では買えない
持ち運びづらい

より安価でCO2ランプほどのサイズになったら
どんなことができるのか考えてみました



商品説明

タバコ感知器



ランプ
タバコの煙の濃度が薄くなるにつれて
色が赤、黄、青に変化する

匂い感知玉
臭いを吸ったり、煙を吸ってほくと
匂いを感じる

プロジェクト名：

カカシプロジェクト

実施期間：令和6年4月～令和7年2月

担当教員：境野 広志（デザイン学科 教授）

履修者数：29人

授業の概要及びテーマ

農村、棚田の景観を向上させる独創的な案山子を創作し、実際の地に設置することで、地域の活性化や学生の社会性を涵養する。活動の過程では創作だけでなく地域の方々と深く交流し、農作業や農村維持作業への参加も行う。また存続が危惧されている中山間地の農業やコミュニティについての理解と提案を行う。更に今年度は新たな試みとしてドローンによる地形データを利用してスマートフォン上に3Dカカシを重畳するARカカシも作成する。

実施スケジュール

4月 ガイダンス、現地調査

5月 カカシ作成

6月 カカシ設置、現地交流

8月 農業体験、現地交流

10月 カカシ撤収、現地交流

3月 賽の神参加

実施状況及び成果

4/27 ガイダンス、現地調査



6/2 カカシ設置、現地交流



8/1 農業体験、現地交流



ARカカシ



10/20 カカシ撤収、現地交流

刈取りを終えた棚田からカカシを撤収するとともに、8月に植えたソバの収穫、脱穀を行った。撤収したカカシは分別解体し2月の賽の神でお焚き上げとなるが、一部は希望者に引き取られていった。ARカカシは積雪期まで設置した。



ソバは11月に粉とり皮むきを行い、粉に引いた。12月に2回ソバ打ち教室を開き、学生も2名参加した。

2025/3/2 賽の神参加



所感、今後の展望 など

例年のプロジェクトだが、今年度は更に地域との関係を高め、また学生に雪国独特の生活を体験させるため、12月のソバ打ち、2月の賽の神をプログラムに加えた。全員参加とはならなかったが、より地域住民との関係が深まり、地域の活性化にも繋がったものと思われる。またデザインの新しい提案としてAR カカシの導入を試みた。現物のカカシは農作業への影響や破壊などの課題があるがAR ではそれらを解決するほか、動きや表現により大きな可能性があり、今後もその可能性を検討していきたい。

プロジェクト名：

ニヨロニヨロの知らない世界（長岡高専とのコラボ企画）

実施期間：令和6年5月～令和6年8月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 准教授）、森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：12人

授業の概要及びテーマ

このプロジェクトでは、長岡工業高等専門学校との混成チームによって「ミミズコンポストがある新しいライフスタイルの提案」をテーマに、ミミズコンポストのリデザインや、ミミズやコンポストに興味を持てる仕掛けやイベント等の提案など、さまざまな視点からミミズコンポストを愛することにつながるようなアイデアを自分たちで自由に考える。また、10月に実施されるHAKKO tripで成果物の発表やアイデアの試行など、単なる提案で終わることなく、実際に取り組むことまでを目指す。

実施スケジュール

- 4月 履修者決定、オリエンテーション
- 5月 顔合わせ、テーマの選定とユーザーニーズを見つけるための情報の検討とプレリサーチ
- 6月 デザイン思考やサービスデザインの視点から収集した情報の整理とアイデア出し
- 7月 アイデアの効果を検証するためのダーティプロトタイピング
- 8月 社会実装やビジネスの視点でアイデアのブラッシュアップ、金融リテラシー講義と発表資料の作成、成果発表

実施状況及び成果

今年度で3年目となる当該プロジェクトは、長岡工業高等専門学校と連携して、ミミズがある新しいライフスタイルの提案をテーマに、ミミズ粉末の普及やミミズコンポストのシェアリングサービスの新しいアイデアの提案を目指して、SDGsへの貢献やイノベーションを創出できる起業家マインドを育成することを目的に、長岡造形大学生12名と長岡高専生11名の学生が混成チームで定期的に活動を実施した。これまでは6月に事前レクチャーを行った後に、8月に4日間かけて集中的にプログラムを実施してきたが、アイデアの検討や成果物の準備などに十分に時間をかけることができなかったため、成果物もダーティプロトタイプによるものが主であった。そこで、今年度は、実施内容を分散させるように、月1回の頻度でプログラムを実施した。その結果、プロトタイプの制作やアイデアの見直しなどに時間をかけることができた他、これまでよりも具体的な成果物としてまとめるに至った。これらの成果物とリーンキャンバスモデルによる

ビジネスプランをまとめ、成果発表会にて発表した。

履修者からは「講義も含めて興味深い話が多くて楽しかった。ミミズを通してビジネスのことなどを勉強出来たのが面白かった」や「内容は難しかったですが、メンバーと試行錯誤しながら良い具合の着地点を探すのは他の授業にはない刺激的な時間でした。」などの意見があり、履修者らにとっても多くの学びにつながったのではないかと考える。



所感、今後の展望 など

今年度は、これまでの実施内容や実施スケジュールの見直しを図り、短期集中型ではなく、長期的に履修者がアイデア出しやプロトタイプの制作、成果物等のまとめに時間をかけられるようにした。その結果、昨年度までよりも成果物の具体性や完成度が向上したことから、これらの変更点が教育効果にも一定の効果があったのではないかと考える。また、当該プロジェクトは今年度をもって終了するが、長岡造形大学の学生と長岡高専の学生が交流し、それぞれの強みを活かしながらアイデアをまとめていく貴重な機会になったと考える。

※所属等はプロジェクト当時のもの

プロジェクト名：

地域おこし協力隊の準隊員になろう！

実施期間：令和6年5月～令和7年1月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：10人

授業の概要及びテーマ

地方創生の担い手の一つに、地域おこし協力隊制度がある。この制度は都市部に住む者が地方都市や中山間地域に移り住み、地域に根差した活動や起業的アクションを通じて地域課題の解決や移住促進につなげるものである。このプロジェクトでは、長岡市が取り組む「半学半域型」の地域おこし協力隊員の活動に参画しながら、地域課題の解決に必要なスキルやノウハウを学ぶとともに、自身ができる地域課題の解決方法を見つけてチャレンジする。

実施スケジュール

4月 履修者決定、オリエンテーション

5月 顔合わせ、チームビルディング

6月～10月 長岡市政策企画課に所属する半学半域型の地域おこし協力隊員の活動に参画

11月～1月 地域おこし協力隊員の活動で得られた知見をもとに自主的な地域活動の企画と実施

実施状況及び成果

当該プロジェクトは、長岡市政策企画課に所属する「半学半域型」の地域おこし協力隊員の活動に履修者らが参加し、地域おこし協力隊の存在目的や、隊員によって異なる地域課題の解決に向けた取り組みなどに対する理解を深めた。また、地域おこし協力隊員の活動経験をもとに、履修者自らデザインによる地域おこし活動につながるイベントや取り組みを企画、実施した。具体的には、「半学半域型」の地域おこし協力隊員が実施している自己受容を高めるための自己内省型のワークショップや長岡市内の高校生向けにデザインの面白さや楽しさを伝えるためのワークショップなどの実施補助やワークショップ内でのワーク等の企画を行った。その後、履修者のなかで有志によるプロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトでは、ミライエ長岡で実施されている小学生向けのプログラムである「クリエイティブキッズ」の枠組みを活用して、小学生を対象とした全4回の連続講座として、リサイクルやアップサイクルを意識したものづくりワークショップを企画し、各回、履修生が講師となって10名の小学生に向けて実施した。このワークショップでは、廃材や廃基盤、古ネジなどを組み合わせたオリジナルのロボットとそのロボットの家の制作や、自分だけのオリジナルモンスターをスケッチブックに描き、それを参加小学生が持参した幼少期の子供服や着なくなった服などを用いたぬいぐる

みの制作、さらに、使用済みのペットボトルキャップや日用品等のキャップを小片化し、アイロンによってスタンドグラスのように加工したものを用いたランプシェードの制作などを各回で実施した。このワークショップに参加した小学生からは「ゴミと思っていたものを使って素敵な作品を作ることができて楽しかった」、「同じ材料を使っているのに完成すると一人ひとり違ってびっくりした」などの感想があった。



所感、今後の展望 など

このプロジェクトでは、毎年異なる地域おこし協力隊員の活動に履修学生らが参画し、デザインを通じた地域おこし活動についての理解を深めることと、履修学生らの要望によって、地域おこし協力隊員の活動で得た知見やノウハウをもとに、自らプロジェクトを立ち上げ、ワークショップやイベント等を実施してきた。今年度は、地域おこし協力隊員の活動にただ加わるだけではなく、最終的に全4回の小学生向けのワークショップを企画、実施するまでに至った。実際にゼロベースでイベントや取り組みを企画することが初めての学生ばかりで、ワークショップの準備や広報、参加者の調整等などに苦労する場面もみられたが、プロジェクトマネジメントへの理解や教育効果にもつながったと考える。

※所属等はプロジェクト当時のもの

プロジェクト名：

ラオス不発弾汚染地域における持続可能な商品開発を目指した Champayayam project

実施期間：令和6年4月～令和7年11月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：5人

授業の概要及びテーマ

東南アジアに位置するラオス人民民主共和国はアジア最貧国の一つとされ、特に北部に位置するシェンクアン県は、ベトナム戦争時代の不発弾汚染による農地不足から、人々の平均年収は極めて低く、生活水準は最低レベルにある。一方で、当該地域にはハチミツや伝統的な手織物、茶葉などの資源があるほか、2019年にはジャール平原が世界遺産に登録されるなど、観光客の増加を目指した観光事業や観光インフラの発展が期待されてきた。このプロジェクトでは、2022年から当該地域において JICA 草の根技術協力事業として実施している、地域資源を活用した観光商品の開発とデザインプロセスの普及活動を行なう Champayayam project の諸活動に参画し、活動対象となるミーサイ村と、ムアン村の二つの集落において観光商品のパッケージデザインを制作するワークショップへの参加や、市街地内にある小学校でのものづくりワークショップの実施、そして、プロジェクトが開発し、すでにパイロット販売が行われている観光商品のプロモーションや魅力発信を目指した展示会の企画や会場のキュレーションなどを実施した。また、帰国後は新潟県西蒲区で開催されたイベントにおいて、観光商品のパイロット販売や情報発信なども実施した。

実施スケジュール

- 5月 オリエンテーション
- 6月 テーマ、課題設定
- 7月 自主制作
- 8月 渡航前のオリエンテーション、渡航準備
- 9月 現地にてワークショップや展示会を実施
- 10月 新潟県内のパイロット販売に向けた準備および出展

実施状況及び成果

当該プロジェクトは、履修者が Champayayam project の現地スタッフや現地で当該プロジェクトのとりまとめをおこなう大学院生の三井さんと定期的にオンラインで打ち合わせ等を行いながら、現地で実施するワークショップや観光商品の展示会の準備等を進めるとともに、履修者各自でそれぞれチャレンジしたいことや取り組みたいことを決定し、その準備を進めてきた。今年度は、渡航先であるシェンクアン県の県庁所在地であるポンサヴァン市街地内にある JENIDA SCHOOL にて包みボタンづくりのワークショップと、タイ

ダイ染によるハンカチづくりのワークショップの二つのワークショップを実施した。また、Champayayam project の活動対象集落であるミーサイ村にて、観光商品のパッケージ制作を行うためのワークショップに参画し、現地政府機関関係者や集落住民との交流を図るとともに、国際協力におけるデザインプロセスの導入と実践の可能性についての理解を深めた。これらの経験を踏まえて、9月5日から開催された観光商品のパイロット販売およびプロモーションを目的とした展示会では、履修学生らによるワークショップの企画や、県立博物館や世界遺産ジャール平原ビジターセンターなど、市街地内複数箇所にあるパイロット販売の施設等を接続するとともに、他の観光地の周知を図る共有マップの作成、観光商品の制作プロセスの視覚化など、様々な取り組みを実施した。この展示会では、活動対象集落の住民やラオス国内外の観光客など100名以上が来訪し、彼らとも観光商品にかかるディスカッションを行うことができた。また、帰国後は、新潟県西蒲区で実施された浜めぐりイベントに出展しラオスの観光商品のパイロット販売やラオスの情報発信を行った。



※所属等はプロジェクト当時のもの

所感、今後の展望 など

今年度で2回目となるこのプロジェクトでは、開発途上国における国際協力の場面において、デザインの可能性を理解することを目的として、Champayayam project の諸活動に参画するとともに、履修学生らが取り組みたいことやチャレンジしたいことをワークショップ等で実施した。特に、現地で実施した展示会では、履修学生が中心となってさまざまな企画を実施し、展示会の来訪客からフィードバックを得ることで、商品開発や商品のプロモーション等を行う際に必要な知見やノウハウを学ぶことにつながったのではないかと考える。また、現地での経験や得られた情報をもとに、日本国内でもパイロット販売や情報発信を行うことによって、単に国際協力の活動に参画するだけでなく、情報の発信方法や魅力の伝え方など、商品の販売に必要なノウハウについても理解を深めることに繋がった。

プロジェクト名：

FM NAGAOKA メディアプロジェクト

実施期間：令和6年4月～令和7年1月

担当教員：池田 亨史（デザイン学科 准教授）

履修者数：12人

授業の概要及びテーマ

長岡造形大学発、学生が創るクラフトラジオ（地域協創演習）。FM ながおか 80.7Mhz にて、9/7（土）から2025年2/10までの半年間（21:10～25）、毎週土曜日に配信。インターネットの普及により「ポッドキャスト」や「ライブ、オンデマンド配信」による音声メディア表現が広がっている現在、ラジオ番組「RADIO CAMPUS」では、音メディアとの親和性が高い学生たちが新しい感性でラジオ番組を制作した。

実施スケジュール

5月 初回オリエンテーション、企画内容の説明MC・広報などの役割分担、企画シート制作、企画決定、制作開始

6月～7月 制作期間

8月 完成品納品

7月 NHK アナウンサー 石澤典夫氏 講演 勉強会

放送スケジュール：9/7 OA開始 → 2025/2/26 OA終了

実施状況及び成果

エフ長でお馴染みの看板パーソナリティー佐藤央氏がプロの所作指導として来校（計6回）。学生の企画や内容を監修してもらい、OAに関しての編集作業も行っていた。また、7月12日には現役のアナウンサーでもある石澤典夫氏に来校していただき、講演や勉強会を行った。

番組のテーマは「NAGAOKA-MONO」（長岡の名産品を紹介）。市内のさまざまなスポットに向き各自で収録・編集を行った。幅広い長岡らしさが伝わる音源が集まった。FM ながおからは視聴者からの反応が良いとの報告もあり再放送も行っていただいた。頭3分間のMC担当の学生が2年連続で受講しており、雰囲気をつくるのに役立った。また、RADIO CAMPUS 特別編として、地球温暖化プロジェクト（長岡市環境政策課協力）や卒業研究展の番組制作を実施した。

地域性が濃く出たテーマだったので、番組制作においての魅力が増した。ネット視聴できるようにアーカイブを「Voicy」（ポッドキャスト アプリ）にて格納している。



所感、今後の展望など

FM ながおかでの収録協力を行ってもらった為、編集作業が短くでき、学生の制作時間の短縮ができた。番組実装においては、街づくりにも貢献でき、リスナーから高評価をいただいている。反省点としては、番組のプロモーションに時間を割く事が出来なかった為、認知度不足が問題点である。SNS への展開なども視野に入れて番組制作を続けたい。

プロジェクト名：

Upcycle project 「The ニュー」

実施期間：令和6年4月～令和6年12月

担当教員：池田 享史（デザイン学科 准教授）、中村 和宏（美術・工芸学科 教授）

履修者数：20人

授業の概要及びテーマ

長岡造形大学の学生による長岡の為のガラスアップサイクル計画第三弾。新潟県内で集められたリサイクル瓶（日本酒720ml）の上部をカットし、絵付け・加工を行う事で、瓶は新しいガラスタンブラーとして生まれ変わる。完成した商品は、箱にスリーブ上のデザインをあしらい、長岡市の「ふるさと納税返礼品」として販売される。（web：ふるさとチョイス）

実施スケジュール

- 5月 ガイダンス・オリエンテーション、SDGs及びUp cycleの講義
- 6月 パッケージデザインレクチャー、ガラス絵付け
- 7月～9月 焼き付け実習（ガラス工房）、パッケージデザイン制作
- 12月 パッケージカット組み立て 完成 提出

実施状況及び成果

授業内容は、おおむね順調であった。

昨年の改善点を活かし、本年度のテーマを「雪」とした。アクリル顔料の作業を簡単にする為 dot 表現によるデザインを推奨しながら制作進行した。こってりとした作品よりも、シンプルでモダンな表現が多くあった。雪の結晶をデザインする学生が多く、見た目も華やかな仕上がりになった。

パッケージデザインに関しては昨年同様、抽象的な作品が商品の美しさを際立てていた印象。例年、焼き付け実習は、美術工芸学科の学生のサポートもあり、スムーズに進行できた。学生の関心度も高く、例年作業が早くなる傾向がある。

所感、今後の展望 など

昨年度よりもデザインのクオリティーが上がり、ふるさと納税の返礼品としても見応えのあるものが出来た。また長岡の地酒専門卸である、原商株式会社の Web サイトにて返礼品ノベルティーとして活用された。（クラフトタンブラー付き 長岡人気蔵五選飲み比べセット）

工房の使用人数を考えると、次年度も人数制限を行い授業を開催したい。



プロジェクト名：

長岡まちづくりタウン誌プロジェクト：Weekend NAGAOKA 2024

実施期間：令和6年4月～令和7年2月

担当教員：池田 享史（デザイン学科 准教授）

履修者数：33人

授業の概要及びテーマ

長岡市のまちづくりを促進させる「タウン誌」の制作。取材した内容を文章で詳しく表現し自身のイラストで内容を視覚化する。ルポライティングを通じ、漫画のコンテンツ要素やことばの伝え方などのデザインワークを学ぶ。令和6年度は「ZEPPIN NAGAOKA（絶品長岡）」。長岡の嬉しい・楽しい・おいしいをテーマにおでかけしたくなる穴場スポットを紹介する。特別ゲスト講師として漫画家・イラストレーター「なとみ みわ」氏を迎え、ルポライティングに欠かせない取材力やイラストレーションを指導してもらった。

実施状況及び成果

テーマ内容が分かりやすかったため、取材対象店舗・商品（1人1箇所）を決める事が容易であった。柔軟な着想により、幅広い企画や表現が生まれ、制作に関して密度の濃い作品が仕上がった。ディテールが面白い作品が多く見られ、ルポライティングの特徴が生かされている。また、なとみ先生の体験講義や企画・原稿チェックは学生にとってリアルな学び

に繋がった。時間的な都合で外部の意見交換会ができなかったため、次年度の反省点としたい。昨年度の印刷物は令和6年12月まで発行があったため、令和6年度の印刷を令和7年4月から予定している。

所感、今後の展望など

企画書を制作し実行した結果、アポ取りや取材に関してとてもスムーズな流れができた。特に漫画やアニメが好きな学生は表現レベルの高い作品が完成している。

学生のデジタルスキルが高くイラストの8割がデジタル表現だった。アナログ表現も若干加わり、バラエティーに富んだ内容となった。

2年生が半数程参加したため、デザインの知識が低く、レイアウトがうまくいかずに編集がハードであった。また、長岡市の観光企画課のご協力により春以降にプロモーションも行う予定。

例年、冊子が好評なため、次年度は発行部数を増やしていきたい。



※所属等はプロジェクト当時のもの

プロジェクト名：

越後みしま竹あかり街道 2024

実施期間：令和6年5月～令和6年10月

担当教員：北 雄介（建築・環境デザイン学科 准教授）、羽原 康成（建築・環境デザイン学科 准教授）、岡井 美奈（建築・環境デザイン学科 助教）

履修者数：49人

授業の概要及びテーマ

三島ライトアップ実行員会が主催し、長岡造形大学が共催するイベント「越後みしま竹あかり街道」の、1つの会場の空間演出を担うことで、地域貢献を行なう。空間演出のデザインだけではなく、竹の伐採や加工、設置、片付けまでを一貫して体験する。

実施スケジュール

- 5月 キックオフ、伐採+現地視察
- 6月 隊ごとに検討を進める
- 7月 進捗報告会
- 9月 加工
- 10月 イベント当日（26日）、片付け（27日）

実施状況及び成果

学科や学年をまたぐ49名の学生が力を合わせ、地元の方々とも協力しながら、三島の街道沿いの「長照寺駐車場」における空間演出や、街道全体を対象としたイベント企画などを行った。

●前期期間：伐採とアイデア出し

今年度から、暑い9月ではなく5月に伐採をするスケジュールとした。急斜面に苦戦しながらも、地元の「ライトアップ実行委員会」メンバーと協力しながら、4m×約250本分の竹を切り出した。

そして大型オブジェを制作する「目立ち隊」、全体レイアウトを担う「ばらまき隊」、小さなオブジェをたくさんつくる「こだわり隊」、イベント企画・実施を行う「楽しませ隊」に分かれ、実際の竹加工をしながらアイデアを出していった。その中で、「百鬼夜行」を全体コンセプトとして、制作することに決まった。



●夏休み～本番まで：隊ごとの制作活動

4つの隊に分かれ、夏休み期間は自主参加で、試作を繰り返しながらそれぞれの担当部分を詰めていった。そして9月下旬の2日間の加工日は、初日の午前中に大雨に見舞われるなどの苦難もあったが、無事に加工や組み立ての作業を終えることができた。



●イベント当日～片付け

迎えた当日は、まず朝から地元中学生らと協力しながら、街道全体に竹を設置していった。そして16時の点灯式を合図に、火を灯して回った。コロナ禍以降で初めて晴天に恵まれ、約1万2千人の来場で盛り上がった。

本学の担当会場は、「目立ち隊」による「唐傘おぼけ」をモチーフとした巨大オブジェが中央に立ち、その周りを「ばらまき隊」による三角形のユニットが円形に囲む。そのユニットには「こだわり隊」による、ランタンや、絵柄を映し出すバンブーウォールなどが取り付けられた。

キャンドルや投光器によって照らし出され、迫力と一体感のある空間演出となった。

「楽しませ隊」は「どこどこおぼけ」というイベントを実施した。街道内に、おぼけを映し出す三脚型オブジェが4つ設置され、それを探して歩くことで、街道全体を巡ることができるという企画である。参加者には、パンフレットと手持ちランタンとおぼけのお面を販売したが、見事に200セットを完売し、街道内にはおぼけを探す親子連れなどが数多く見られた。

翌日の片付けでは、作品との別れを惜しみながら、午前中でほぼ作業を終えた。



所感、今後の展望 など

多くの方が会場に詰めかけ、学生たちの力作に驚きの声をあげてくださった。例年そうであるが、本学学生の作品は立体的で迫力があり、街歩きイベントなどの工夫も楽しく、会場の中でも異彩を放つ存在である。また実現までのプロセスにおいても、幹事や隊のリーダーの学生を中心とした、数々の試作を通した粘り強い検討は見事であった。大きな怪我がなく終わったのも、大変よかった。

学生たちの声を聞くと、かけた労力は大きかったが、かなり満足度の高いプロジェクトとなったようである。地域貢献ができたこと、学年や学科を越えた密な協働ができたことなどがその理由のようだ。伐採を前期に行なうスケジュールも適切であった。ただし負担の偏りや、情報共有の不足などには学生からの改善の声も上がり、今後の検討材料としたい。

プロジェクト名：

SF プロトタイピングの実践

実施期間：令和6年5月～令和7年2月

担当教員：森本 康平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：14人

授業の概要及びテーマ

この演習ではSFプロトタイピングの手法に則り、テクノロジー、社会、人文学領域の研究動向をリサーチした上で、現在の延長線上にない未来シナリオを想像する。そして、プロトタイプ制作、展示を通して、未来の可能性やリスク、及びバックキャストにより見出される現在の問題について、議論の輪を広げることを目指す。プロトタイプは、概要を盛り込んだショートストーリーを軸に、長編小説、イラスト、プロダクト、映像等、多様なフォーマットを選択できるものとする。成果は冊子等の形態でアーカイブ化するとともに、制作物を活用した公開ディスカッションを行う。なお、リサーチ及び成果発表のプロセスにおいて、ミライエ長岡に入居する企業及びイノベーションサロンメンバーの方との連携を予定している。

実施スケジュール

- 5月～6月 ガイダンス、リサーチ、プロットプロトタイプ制作
- 7月～9月 リサーチ、ショートシナリオ制作
- 10月～1月 成果物制作
- 2月 公開ディスカッション

実施状況及び成果

過去2回のプロジェクトは個人で制作を進めたが、本年度のプロジェクトは初めてチームを構成して進めた。(2～4人チーム×4+個人×1)

【アイスブレイク】

好きなSF作品の魅力を語りながら自己紹介を行う。

【リサーチ】

東日本電信電話株式会社新潟支店による未来の技術に関するレクチャー。

楽天グループ株式会社による未来洞察に関するレクチャー。



アイスブレイクで挙げたSF作品を対象に、作品に含まれる「問い」及び、それを象徴する「設定／ルール／ガジェット

ト／事件／台詞」等を抽出。さらにそれらを5つのカテゴリー「テクノロジー／制度・ルール／社会問題／価値観・カルチャー／個人の悩み・違和感」に分類し、SF作品の構成要素を探求する。

書籍、インターネット、ニュース、展示会など、多様なソースから未来を想像する手がかりとなるキーワード（フューチャーピース）を上記のカテゴリーごとに収集。

【イマジネーション／シナリオ制作】

収集したキーワードを基に、未来を想像するワークを実施し、各チームでシナリオのプロトタイプを作成。



さらに、そのプロトタイプをベースにリサーチと議論を重ね、社会設定や登場人物を具体化し、読者に何を考えてもらいたいのかという「問い」を含むショートシナリオを創作した。

【制作】

ショートシナリオに加え、世界観に没入し、問いの想起を促すためのビジュアルイメージ・ウェブサイト・動画を制作する。また、それらをまとめたマガジンを制作した。



※所属等はプロジェクト当時のもの

【公開ディスカッション】

長岡造形大学第4アトリエ棟にて公開ディスカッションを開催。各チームがシナリオの設定、世界観を伝えるプレゼンテーションを行なった後、来場者とともにディスカッションを行った。



所感、今後の展望 など

本年度は初めてチームによるプロジェクト進行を導入した。複数のメンバーで情報収集や議論を行うことで、多様な意見がシナリオに反映され、ストーリーに壮大さと多面性がもたらされたように感じた。また、メンバー間の価値観の違いから自然と問いが生まれる状況ができたのではないかと考える。一方、個人制作で進められたストーリーではパーソナルな視点が際立っており、制作体制による違いが表れたことも印象的だった。

第4アトリエ棟での公開ディスカッションでは、シナリオ以外のコンテンツも充実していた上、学生主導でディスカッションが進められたこともチームプロジェクトならではの成果であったように思う。また、イベントには幅広い年代の参加者が集まったが、前提となる知識量に左右されることがなくフラットな議論が展開された。作品の中には、結婚、出産といった若干センシティブな設定を含むストーリーもあったが、フィクションという枠組みを介することで、公の場での議論に対する心理的ハードルを下げられていたように感じた。このようにフィクションを媒介として議論を促進するSFプロトタイピングは有効性が高く、プロジェクトに参加する学生とともに、今後も探求を続けていきたいと考える。

プロジェクト名：

長岡未来デザインコンテスト (powered by 楽天) (4 大学 1 高専コラボ企画)

実施期間：令和 6 年 8 月～令和 6 年 11 月

担当教員：渡邊 誠介 (建築・環境デザイン学科 教授)、 徳久 達彦 (デザイン学科 准教授)

履修者数：4 人

授業の概要及びテーマ

長岡未来デザインコンテストは、長岡市と楽天グループ株式会社が 2022 年 1 月に締結した包括連携協定に基づく取り組みで、学生の自由な発想で長岡の課題解決を目指すアイデア実践型プログラム。

課題解決と実践を通じて、果敢に挑戦する若者をまち全体で育てていきたいという思いではじまった産学官連携の取り組み。2024 年度は長岡の獣害対策という課題解決がテーマ。

実施スケジュール

8 月 準備プログラム

9 月 プレゼン審査会

10 月 楽天東京本社ツアー & アイディアブラッシュアップ

11 月 長岡サスティナブル week in ミライエ

実施状況及び成果



所感、今後の展望など

長岡造形大学からはやや参加者が少なかった。次年度開催されるかは不明であるが、他大学とのチームワークという貴重な体験や楽天本社社員からのアドバイスが受けられるため、今後も同様なプログラムがあれば積極的に参加してほしい。

プロジェクト名：

いいことをデザインする「かいしゃ」プロジェクト (LLP) (4 大学 1 高専コラボ企画)

実施期間：令和 6 年 5 月 ~ 令和 6 年 8 月

担当教員：渡邊 誠介 (建築・環境デザイン学科 教授)、北 雄介 (建築・環境デザイン学科 准教授)、藪内 公美 (美術・工芸学科 准教授)、徳久 達彦 (デザイン学科 准教授)

履修者数：1 人

授業の概要及びテーマ

起業プラン、ビジネスプランを練り実際に外部のビジコンでピッチすることで若者やイノベーションデザインの起業プロセスの疑似体験をする。

起業支援センターである Clip 長岡が実施するデザイン思考を活用したリーンローンチパッド (4/19 ~ 8/11 の間の主に週末 8 日間) に参加する。長岡造形大学のメンバーオンリーでも長岡大学、長岡技術科学大学、長岡工業高等専門学校のメンバーと混成チームでもよい。ミライ工長岡で実施。

実施スケジュール

- 5 月 アイデア発想、懇親会
- 6 月 商品価値検証、ビジネスモデル設計、収益モデル設計
- 7 月 ビジネスプラン化
- 8 月 DEMODAY (発表会) 懇親会
- 9 月 事業化に向けた具体的な指導

実施状況及び成果

The image shows two promotional posters for the LEAN LAUNCHPAD PROGRAM. The left poster is for the 5/18-8/11 period, and the right poster is for the 4/19 period. Both posters include event details, dates, and QR codes.

所感、今後の展望など

残念ながら長岡造形大学から参加者は少なかった。4 大学 1 高専の合同チームでビジネスアイデアをデザインしていく機会なので、今後の積極的な学生の参加が望まれる。

プロジェクト名：

カンボジア開発途上地域の子ども達、障害者、貧困者層に対するデザイン提案と開発

実施期間：令和6年6月～令和6年12月

担当教員：山田 博行（デザイン学科 准教授）

履修者数：4人

授業の概要及びテーマ

開発途上国の障害者、貧困者層の人々に対して、自立につながる事業活動を行う国際NPO・NGO法人と共にカンボジアのシェムリアップ現地でフィールドワークを行い、ボランティア活動と広報マーケティングツールとしてデザイン提案・制作・発表を行う。

地雷による身体障害者、トレンサップ湖の水上生活者、30年の年月をかけて作られたクメール芸術の最高傑作であり世界遺産アンコールワットの視察、児童養護施設での孤児たちとの交流を通じ、対象地域でのフィールドワークを行いながら歴史や環境をとりまく社会問題の現状を理解し、国際協力におけるデザインの活用方法について考える。

実施スケジュール

- 5月 オリエンテーション
- 10月 渡航前のオリエンテーション、渡航準備
- 11月 現地NPOスタッフとのオンラインプロジェクトミーティング開催
- 12月 現地にてフィールドワークおよびデザイン企画と制作6日間
- 1月 振り返りおよびまとめ

実施状況及び成果

活動1日目は国際NPO・NGO法人によるチェイ小学校での歯科検診と歯磨き教室が行われた。この活動は2014年にニューチャイルドケアセンター（通称NCCC）での歯科治療から始まり、2015年からはチェイ小学校で歯科検診、口腔衛生予防教室が行われている。国際NPO・NGO法人が歯科ボランティアを行うようになってからDMFT指数（ある集団一人当たりの虫歯を経験した歯の数を示す指数）は減少傾向にあり、国際NPO・NGO法人の活動の成果が表れている。

我々は写真・映像による記録係と歯科検診を行う歯科医師の方々のサポート係に分かれて活動に参加した。活動初日ということもあり不安もあったが、各々ができる方法で活動に

貢献ができたと思う。子どもたちともたくさん交流ができた。

活動2日目と3日目には、ニューチャイルドケアセンター（NCCC）を訪問した。HGの運営するニューチャイルドケアセンター（通称NCCC）は、孤児の衣食住と自立をサポートする養護施設である。「ハートペアレント」という制度によって、日本から里親として子どもたちを継続支援することが可能になっており、現在9人の子供たちが施設で暮らしながら、語学や芸術、伝統舞踊を学んでいる。



小さな美術スクール（通称SAS）は「一度きりの子ども時代を心豊かに過ごして欲しい」という笠原知子氏の願いによって2008年に創立された、完全無料の美術スクールである。

朝日に照らされ、彫刻が施された巨大な岩の門を次々と駆け抜けていくランナーたち。世界遺産を走る、アンコールワット国際ハーフマラソンは1996年より開催されており、立ち上げ当時、その中心にいたのは有森裕子氏であった。29回目の開催であった今回は世界各国から1万5000人が参加するほどの、大規模な国際イベントへと成長している。

ただ走る（あるいは車椅子を漕ぐ）という単純な行為を、アンコールワットというカンボジアが誇る偉大な土地に集ってする、たったそれだけのことが30年弱の時間を経てたくさんの笑顔と感動を生む一大事業になっている様子を目の当たりにした。多くの人々の心を掴むには複雑奇怪なものよりもっと単純なものでよくて、その地に根ざすまでの長期的な継続が必要なのではないか。カンボジアの等身大の魅力を活用した本大会は一つのデザインの形であることを、実際に現地を訪れることで実感した。



※所属等はプロジェクト当時のもの



所感、今後の展望 など

カンボジアをとりまく歴史学習からはじまり、NPO との事前 ZOOM 会議、現在の状況における問題点実情を取材し、企画提案と納品まで地域における多面的側面からデザインの必要性と効果を実体験として得られたことは非常に濃い体験ができたと感じる。最終日の世界遺産アンコールワットの見学も人と造形の関係において、受講学生に非常に強烈なインパクトを残したようである。

プロジェクト名：

これからのサインデザインを考える

実施期間：令和6年4月～令和6年7月

担当教員：伊達 亘（デザイン学科 助教）、吉川 賢一郎（デザイン学科 准教授）

履修者数：8人

授業の概要及びテーマ

長岡造形大学キャンパスで利用されているサイン/掲示物/掲示場所などを調査し、既存サインのリデザインの提案もしくは将来的に存在するかもしれないサインや表示方法を構想し、コンセプトを元にプロトタイプする。

サインデザインは建物の竣工タイミングに設置される事が多い一方で、リノベーションによる既存の建物を活かしたデザインやデジタルサイネージなど空間における情報提示の手法は多様化している。空間特性/空間を利用する人たちの活動・行動様式/設置場所の持つ文化背景など様々な観点での調査や新しい技術を用いた情報提示の方法を活用したデザインを試みる。

実施スケジュール

- 4月 ガイダンス、履修者決定、キックオフ
- 5月 学内調査・分析、ディスカッション、構想整理
- 6月 中間発表、ディスカッション
- 7月 プロトタイピング、最終発表、振り返り

実施状況及び成果

予定していた授業計画通りに実施・完了した。

履修者それぞれがテーマを設定し、異なるテーマとアプローチで履修者全員がデザイン提案した。一部のそのまま設置が可能な提案についてはプロトタイピンググループを活用して、実際に期間を設けて掲示した。構想していく中で現在の実装が難しいコンセプチュアルな提案も見られた。調査では、車椅子や目隠しなどを活用し、歩いて気づきを発見するだけでない手法を取り入れた。

演習に合わせて、知識面での強化として図書館との協働で選書展示も合わせて実施した。



所感、今後の展望など

7月までの成果物を整理し、2018年より東京ミッドタウン・デザインハブで継続的に実施されている「ゼミ展」の公募へ応募し採択された。2025年5月に展示。4月よりリリースが公開。

他演習の展示期間との重複から掲示期間は長くて1週間程度だったことが勿体無く、より長い時間設置している中での気づきの発見などを体感するための仕組みや取り組みを考えていきたい。通常の必修の演習では時間的にも「作って終わり」となってしまうため、「使う」「伝える」などの作った先にある社会とのつながりや継続していく事、受注して作るだけでなく自らプロジェクトを立ち上げて社会実装するなどのデザインのあり方の重要性を考える演習を考えたい。



プロジェクト名：

文具館・新商品開発プロジェクト

実施期間：令和6年5月～令和7年1月

担当教員：金澤 孝和（デザイン学科 准教授）

履修者数：14人

授業の概要及びテーマ

製品化を前提とした、文具の商品開発目的の授業プロジェクト。

実際の現場から情報を収集し、求められる条件整理～ニーズ把握を経て商品開発につなげる。実際の製品化への一連のプロセスをリアルに体感することで、机上では学べないデザイナーの役割を認識する。妥当性が認められた提案は、量産へ向けたステップへ進む。

実施スケジュール

5月 ガイダンス、売場見学

6月～8月 アイデア展開

9月 プレゼンテーション

10月～1月 ブラッシュアップ

実施状況及び成果

今年度も、製品化を目指すべく授業が進行した。文具館様とのコミュニケーションをリアルタイムで行えるよう、SLACKを活用して情報を一元化した。各学生の進捗状況含めて、全員が共有できた。

テーマは自由であったが、授業内では「地域」「地産」「新潟」というキーワードに関心が高まったこともあり、アイデア展開の多くに反映された。

提案は面白く、興味深いものが多かったが、クライアントの反応が薄いことや、コスト・実売回転率を考えると現実的ではないといったハードルもあり、学生達の頭を悩ませた。この悩みこそが、通常の演習授業では学ぶことが難しいことであり、この授業の成果とも言える。

いくつかのアイデアは、製品化に向けて進行中で、今後の発売が楽しみである。



所感、今後の展望など

連携先である滝沢印刷文具館様とは、単年度で成果を求めず、継続する中での可能性を見出そうというお話をしている。数年は同じスキームで演習を継続して行く予定である。



プロジェクト名：

新潟県地球温暖化防止活動推進センター社会連携環境プロジェクト

実施期間：令和6年6月～令和7年1月

担当教員：池田 享史（デザイン学科 准教授）

履修者数：5人

授業の概要及びテーマ

学生たち一人ひとりが地球環境のことを考えながら、くらしの中でできる30の脱炭素化の取組「にいがたゼロチャレ30」を伝えていく。

研修会をはじめ、学習会やイベントに参加し多くの人たちに問題意識を持ってもらいプロジェクトの活動を広めていく。

実施スケジュール

6月 第1回研修会 6/15：新潟国際情報大学中央キャンパス、第2回研修会 6/22：国際映像メディア専門学校
7月 環境学習会 ゼロチャレ30 学習会 7/16：出雲崎中学校、中間会議 7/10

参加イベント

※下記イベントにてアンケートや推進活動を実施

7月 7/13 新潟市 にいがた市民環境フェア・8/3 糸魚川市 糸魚川おまんた祭り

8月 8/4 見附市 エコアクションinみつけ2024・新潟市 イオン新潟フェア、8/25 関川村 大したもん蛇まつり

9月 9/22 佐渡市 佐渡SDGsまつり2024

10月 10/5 村上市 環境フェスタ村上2024・10/6 三条市 三条スポGOMI大会、10/13 十日町市 YOSHIDA祭・10/13 阿賀野市 コスモスきょうがせまつり、10/19 新発田市 環境エコカーニバル、10/19 魚沼市 環境・交通安全フェア

11月 11/2 加茂市 カモフリマ、11/1 新潟市 にいがた環境フェスティバル2024、11/24 五泉市 宝くじ文化公演「TEAMパフォーマンスラボ×ガチャピン・ムックのサーカスエコロジカル」

1月 1/1 長岡市 目指せ！2050カーボンゼロ 若者たちのゼロへの挑戦

実施状況及び成果

・6/15 第1回〈研修会講座〉

(1) センター長から地球温暖化の現状や取組について説明。
(2) 新しいゼロチャレ30と古いゼロチャレ30を比べ、どのように変わったか、どうして変えたかを考えるグループワークを行った。

(3)：市町村イベント候補を示しイベントによって来場者の意識・興味が異なることを説明。その上で「今、どうして地球温暖化防止の取組が必要か」と来場者に聞かれた場合を想

定し学生たちなりに考えるグループワークを行った。

6/22 第2回〈研修会実習〉番組配信内容：チーム内のコミュニケーションを高めるため、チーム対抗でゼロチャレに関するクイズのトーナメント戦を行った。

その他、県内で行うイベントに参加。啓蒙活動の施策を実施した。



所感、今後の展望 など

アオーレ長岡で開催したゼロチャレ30が運営する30活動の集大成となるイベント「目指せ！カーボンゼロ 若者たちのゼロへの挑戦」は約1200名の方に来場いただき大成功を収めた。ゼロチャレ30による活動報告をはじめ、2050カーボンゼロの実現に向けたさまざまな取組を呼びかけた。新潟県より次年度の依頼も来ており、本年度学生が創作した「みらいの木」「ちきゅうをまもるヒーローで賞」を継続して啓蒙活動に繋げていきたい。

プロジェクト名：

「目指せ商品化」プロジェクト

実施期間：令和6年7月～令和6年10月

担当教員：金澤 孝和（デザイン学科 准教授）、山田 英嗣（デザイン学科 助教）

履修者数：7人

授業の概要及びテーマ

ディノスオンラインショップでの販売を目的とした産学協働開発。

株式会社 DINOS CORPORATION のバイヤーによる指導のもと、価格やターゲット、素材や構造、品質など、様々な制約が重なる中で商業ベースのものづくりを実践的に学ぶ。地域とのつながりもテーマとして掲げ、地元メーカーでの試作・生産が可能な製品のデザイン開発を目指す。

実施スケジュール

- 7月 工場見学、ガイダンス、講義
- 8月 アイデア展開、個別相談
- 9月 プレプレゼン個別相談
- 10月 最終プレゼン

実施状況及び成果

ディノスオンラインショップでの販売を最終目的とした本プロジェクトでは、実務でのプロダクトデザインや商品開発と同様に価格やターゲット、素材や構造、品質など様々な制約や条件を考慮しなければならない。

現役のマーチャンダイザーや製造現場の設計担当者、品質管理や物流を担う企業からの指導のもと、お客様の手元に届くまでの流れを実践的に経験することで、社会に出て企業から求められることのギャップを縮め、即戦力として活躍できるプロダクトデザイナーの育成を目指した。

さらに地域とのつながりもテーマとして掲げ、地元メーカーでの試作・生産が可能であることを前提に「自立可能なコートハンガー」の企画デザインを課題として取り組んだ。

最終プレゼンテーションの結果、参加学生7名のうち、4名の案が商品化候補として選出された。



所感、今後の展望 など

選出された4名のデザイン案は学生の手から離れ、DINOS CORPORATION と新潟県内メーカーとの協業によって現在商品化に向けて試作が繰り返されており、本プロジェクトは来年度も実施の計画がある。継続して取り組み、商品化の実績を重ねることで、学生や地域、参画企業に対して貢献できるプロジェクトに育てる。

ボランティア実習

ボランティア実習は、奉仕（ボランティア）精神を実社会で実現し、日頃修練している知見・技術を社会に還元する経験を積むことをテーマにした授業です。

プロジェクト名：

フェニックス花火ボランティア実習

実施期間：令和6年5月～令和6年8月

担当教員：山本 敦（デザイン学科 教授）、渡邊 誠介（建築・環境デザイン学科 教授）、津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）、竹田 進吾（美術・工芸学科 教授）

履修者数：31人

授業の概要及びテーマ

長岡市のNPO法人ネットワークフェニックスと提携するボランティア活動。長岡花火、フェニックス花火の歴史の経緯を知る。また、フェニックス花火募金活動、長岡花火大会当日ボランティア活動等に従事する。これらを通して、フェニックス花火に関する学びを深め、地域社会貢献としての奉仕活動の意義を理解する。

実施スケジュール

5月～6月 ガイダンス、NPO法人 ネットワークフェニックスの講義

7月 リバーサイド千秋で、4回のフェニックス花火募金活動に従事、NPO法人 ネットワークフェニックスを招いて、対面での長岡花火直前説明会

8月 長岡花火両日に、フェニックス花火観覧席でボランティア活動に従事、フェニックスボランティア解散式（アオーレ長岡）に希望者のみ参加

実施状況及び成果

6月12日 18:00～(円形講義室)NPO法人 ネットワークフェニックスによる長岡花火、フェニックス花火についての解説・講義募金活動の際に手持ち用パネルを作成。1グループ4枚、募金ボランティアの際に持参することとした。

6月30日 アピタ長岡でのフェニックス花火募金活動①(全回11時～13時)

7月7日 アピタ長岡でのフェニックス花火募金活動②

7月14日 アピタ長岡でのフェニックス花火募金活動③

7月21日 アピタ長岡でのフェニックス花火募金活動④

7月31日NPO法人 ネットワークフェニックスの方を招いて、対面での長岡花火直前説明会(於円形講義室)

8月2・3日 11:30～22:10長岡花火両日、フェニックス花火観覧席においてボランティア活動

8月4日 12:30～13:30フェニックスボランティア解散式 有志2名参加

8月6日 レポート提出

これらの学修活動のほか、個別に、DVD『この空の花 長岡花火物語』（大林宣彦監督作品）鑑賞と、道の駅ながおか花火館、長岡戦災資料館見学、新たにドキュメンタリー映画「長岡大花火 打ち上げ、開始でございます」が映画館で上映されたのでこの映画鑑賞の4点のどれかを実行するように強く推奨した。



所感、今後の展望 など

NPO法人のネットワークフェニックスより、長岡花火・フェニックス花火の歴史を講和していただくのをスタートとして、まずは長岡花火が復興・慰霊の花火であることを学生に知ってもらった。事前学習として、映画『この空の花』や長岡花火館、戦災資料館、ドキュメンタリー映画『長岡大花火 打ち上げ、開始でございます』などを選択して、学生たちはその歴史的背景について学んだ。募金活動にあたり、今年度は学生が募金ボランティアの際に手に持つパネル制作の課題を追加した。募金活動では、多くの市民が募金してくれることを通して、ボランティア参加への意義を感じたのではないかなと思う。今年から教員もボランティア参加となり、募金時、長岡花火時にそれぞれ教職員の皆さんに協力をいただき運営することができた。

「フェニックス花火募金活動、長岡花火大会当日ボランティア活動に従事することを通して、フェニックス花火に関する学びを深め、奉仕活動が地域社会貢献として意義あることを理解できるようになる」という目標は、学生のレポートを参照すれば、達成できたことが理解できる。今年は国際ボランティア学生協会(IVUSA)の学生が多く参加してくれた。授業で参加している自分達とのボランティアへのポテンシャルの違いを感じた学生もいて、ボランティアへの意識も変わっていったと思う。次年度以降、半自主型の授業運営となるが、NPOフェニックスと連携、協力しながら学生の安全面を重視して授業運営していくことが望まれる。

※所属等はプロジェクト当時のもの

地域特別プロジェクト演習

地域特別プロジェクト演習は、様々な領域の大学院生がチームを組み、地域が抱える実課題をテーマにプロジェクトとしての組み立て、フィールド調査、解決にいたるまでのプロセスを一体的に学び、新たな価値創造に取り組む演習授業です。

プロジェクト名：

壊して気づくイノベーション

実施期間：令和6年8月～令和7年1月

担当教員：森本 康平（大学院造形研究科 准教授）、板垣 順平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：2人

授業の概要及びテーマ

日常生活のなかには様々なプロダクト、インフラ、景観、制度や仕組みなどがある。このプロジェクトでは、長岡市内をフィールドに、身近な生活環境から不具合であるにもかかわらず、その状態が維持されているものやことなど、壊すべき対象を見つけだし、俯瞰的な視点でその対象の壊すべき理由や目的を見出す。最終的には、破壊に繋がるアクションを通じて、対象の本質や存在意義についての理解を深化させることを目指す。

実施スケジュール

8月 ガイダンス

9月 アイデアシート共有、テーマの決定

10月～12月 調査・制作・実践・議論

令和7年1月 進捗報告・議論、合同成果発表会

実施状況及び成果

修士課程1年の学生2名によるチームプロジェクトとなったが、1名がドイツ・トリアー応用化学大学に留学中であることから、ZOOMやチャットを活用して議論を行い、それぞれの環境でリサーチを実施する形でプロジェクトを進めた。

【テーマ検討】

各チームメンバーがそれぞれの身の回りで発生している問題を調査し、その結果をアイデアシートにまとめた。そして、議論を重ねた結果、遠隔地のメンバーとのコミュニケーションを阻害する要因である「時差による煩わしさ」を破壊することをテーマに設定した。

【リサーチ】

課題に対する視野を広げ、より深く理解するためのリサーチを実施。はじめに、人々の時間の捉え方に関する情報を収集し、時間に厳格な「モノクロニック」と、おおらかな「ポリクロニック」という分類について詳しく調査を行う。また、コミュニケーションにおいて個人差が生じやすい「そろそろ」「もうすぐ」などの表現にも着目した。そして、長岡造形大学のラウンジにて学生を対象としたアンケートを実施し、各自の時間の捉え方や時間の流れを感じる事象についてデータを収集した。同様に、トリアー大学でも多様な国籍の学生に対してヒアリングを行い、出身国ごとの時間感覚の違いについて情報を集めた。



【アウトプット制作】

アウトプットとして時差を楽しむ SNS 「TIMA」を提案した。主な機能は以下の3つである。

TASK - 時間の感覚を測る

MOME - 時間の感覚を共有する

Message - ユーザー同士のコミュニケーション



TIMAには、時差の視覚化や自動変換といった機能に加え、同時刻にタスクを実行する仕掛けを導入。それによって個人の時間の捉え方を分析し、その結果に基づいてチャット内容をフォローする機能も組み込んだ。

コンセプトや特徴がわかるプロトタイプを制作し、長岡およびトリアーの両環境でアプリの機能性や効果に関する意見を収集。これらの結果を踏まえ、最終発表会にて報告を行った。



※所属等はプロジェクト当時のもの

所感、今後の展望 など

本年度のプロジェクトは、遠隔地間での共同ワークという状況を生かしたテーマ設定となった。起点となったのは遠隔地とのコミュニケーションに関する典型的な問題であったが、単に時差の弊害を解消するツールを目指すのではなく、個々の時間の捉え方にまで視野を広げることで、課題をより深く掘り下げることができたように思う。また、完全な解決を目指すのではなく、問題の一部を解消しつつも、時差や時間感覚の差の「見える化」を通して、個々の感覚の違いを楽しめる要素を盛り込んだことで、ユニークな提案に仕上がったと考える。

リサーチの結果は、時間に関する意識の違いが引き起こすコミュニケーション上の課題を解決する可能性を感じさせており、さらに、アプリのプロトタイプは個人の時間間隔の差の存在に気づかせるための「作品」として機能するのではないかと考える。

プロジェクト名：

地域を歩く Arts-Based Research (トリアー)

実施期間：令和6年4月～令和7年1月

担当教員：小松 佳代子（大学院造形研究科 教授）、 小林 花子（美術・工芸学科 准教授）

履修者数：4人

授業の概要及びテーマ

トリアーへ赴き、トリアーという地域で制作することの意味について考える。Kunsthalle Trier で行われる国際美術展の展示準備に携わることで、海外のアーティストがどのように地域とアートとの関係を考えているかを知る。

実施スケジュール

- 4月 ガイダンス
- 5月 事前準備、実施内容の検討
- 6月 俳句についてのレクチャー、実施内容の検討
- 7月 ワークショップ内容の決定
- 9月 実施前最終打ち合わせ、トリアー応用科学大学でのワークショップ、Kunsthalle Trierでの展示補助、イダーオーバーシュタイン校訪問
- 11月 振り返り
- 1月 最終発表に向けた準備、展示準備、PBL (Project Based Learning) 発表会

実施状況及び成果

2024年9月23日、24日の二日間、トリアー応用科学大学にて、トリアーの学生と本学の大学院生が交流するワークショップ Making HAIKU based on the experience of walking around Trier town. を実施した。

1日目：まず一人ひとりが自らの研究・制作活動を紹介した後、本学の大学院生が俳句について英語で説明。トリアーの学生と本学の学生が2から3人のグループでトリアーの街を散策して街のなかで気になったものを撮影した。撮ってきた写真を見ながらドイツの学生はドイツ語で、日本の学生は日本語で俳句を作った。

2日目：それぞれの俳句を英語で説明した後、硯で墨を擦り、毛筆で俳句を書いた。本学の学生が用意した和紙、木片、樹皮、漫画雑誌のページなど、さまざまなメディアにそれぞれがつくった俳句を書いたものをグループの人数分だけ作ってそれぞれが持ち帰った。

学生たちは翻訳アプリを駆使しながら非常に楽しそうにディスカッションし、制作した。



Kunsthalle Trier で小林がレジデンスアーティストとして



招聘された国際展示 Rai-Zen-Dā のインストール補助作業。

トリアー応用科学大学のイダーオーバーシュタイン校（ジェームストーン&ジュエリーを専門とするキャンパス）では、Kollischan 教授、Renner 助手、大学院生の Gina さんがキャンパス内の施設と、大学そばのチェーン工場を案内してくださり、トリアーの学生たちの作品や作品集も見せていただいた。

所感、今後の展望 など

海外での PBL は初めてのことで、現地でのアクシデントもあって、大変なことは多々あったが、大学院生にとって、やはり現地に行き、直接トリアーの学生と議論できた経験は何にも代えがたい貴重な経験であったと考える。

海外でのプロジェクトを PBL に繋げた今回のようなプログラムは、作家、芸術関連の研究者を目指す学生にとって有意義な経験を積む機会になるため、今後もこのような交流プログラムが創出できるよう、交流先との関係の構築も含め検討していきたい。

プロジェクト名：

存在意義をデザインするパーパス・ブランディング & アクション

実施期間：令和6年5月～令和7年1月

担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 准教授）

履修者数：4人

授業の概要及びテーマ

SDGsの達成やDXの推進のように、「意識しなければならないこと」や「実施しなければならないこと」が目的や前提となった取り組みが多くある昨今の社会において、パーパス・ブランディングという考え方が注目を集めている。パーパス・ブランディングは、個人と組織の両方の存在意義を明確にするとともに、それぞれの接点をうまく重ね合わせることで、目的や前提に囚われない成果やアウトプットの創出につながるほか、個人や組織のやりがいや誇りの醸成にも繋がることが期待されている。

このプロジェクトでは、行政や企業、民間団体などの外部団体等との連携を図りながら、パーパス・ブランディングをもとにしたアクションを実施し、その効果を検証する。

実施スケジュール

4月 授業ガイダンス

6月～9月 プロジェクト内容の企画・実施、情報共有

10月 情報共有

12月 プロジェクトの実施・検証、情報共有

1月 成果のまとめ、発表

実施状況及び成果

当該プロジェクトでは、履修学生一人ひとりが得意とすることや専門性を生かすとともに、自身の理想やこうありたい、こうしたいという思いをパーパス（存在意義や理由）として抽出し、それらと地域課題や地域のニーズを接続するための活動を実施した。今年度は、修士課程1年の大学院生2名と修士課程2年の大学院生2名の計4名が当該プロジェクトを履修し、長岡市内の高校生が進路選択や多様な生き方を受容するためのプロジェクトや、地域アートの実践を目指したネットワーキング、ラオス人民民主共和国でのJICA草の根事業の一環として実施した、活動対象集落の人々が観光商品のブランディングとして制作したロゴを活用した他人事から自分事へと意識の変化を試みるためのワークショップの実施など、それぞれの修士研究のテーマとも関連付けながら、外部の組織や団体などと関わりながらプロジェクトを企画、実施した。

今回の演習を通じて、一人でプロジェクトを企画、実施するのではなく、自身のパーパスを他者に伝え、共感を得ること（＝この指止まれ）を通してプロジェクトを企画、実施す

ることでプロジェクトのレバレッジにつながることや、持続的なプロジェクトの運用方法などを提示することができた。特に、今年度の演習では履修者それぞれがプロジェクトを進めるなかで、履修者同士で共にワークショップを企画・実施するなど、当初は想定していなかった活動にもつながった。この活動は演習後も継続されることから、今後の展開やさらなる成果に期待する。



所感、今後の展望など

今年度は、大学院生一人ひとりが主体となってプロジェクトを立ち上げ、各自で取り組むような実施体制としたほか、必要に応じて大学院生同士でワークショップを実施するなど、ヨコの接続などもみられた。これは、各自でプロジェクトを進めながら情報共有や進捗確認を履修者同士で定期的に行っていたことから、お互いに実施内容に対するフィードバックや議論などが行われるなかで生まれたものである。今後も外部の接続と内部の接続を活かせるようなプロジェクトとして進めていきたい。

※所属等はプロジェクト当時のもの

**市民の生涯学習・
文化活動の支援**

長岡造形大学展示館「MàRoù の杜」

「長岡造形大学展示館 MàRoù の杜」は、長岡市内で医師の傍ら画家として油彩・素描作品を制作してきた故・丸山正三画伯の約3,000点におよぶ絵画と、約8,000点の習作やスケッチを展示・収蔵するため、多くの市民・団体・企業などの寄付により2013年6月に開館しました。

令和6年度は「丸山正三展2024」及び本学創立30周年を記念し、ポスター展「5 INTERNATIONAL POSTER DESIGNERS」を開催しました。

令和6年度開催展覧会



収蔵作品展

丸山正三展 2024

会期:2024年6月4日(火)～6月30日(日)

9:00～16:00 (月曜休館)

来場者数:321名



長岡造形大学創立30周年記念企画展

5 INTERNATIONAL POSTER DESIGNERS (5人の国際的なポスターデザイナーたち)

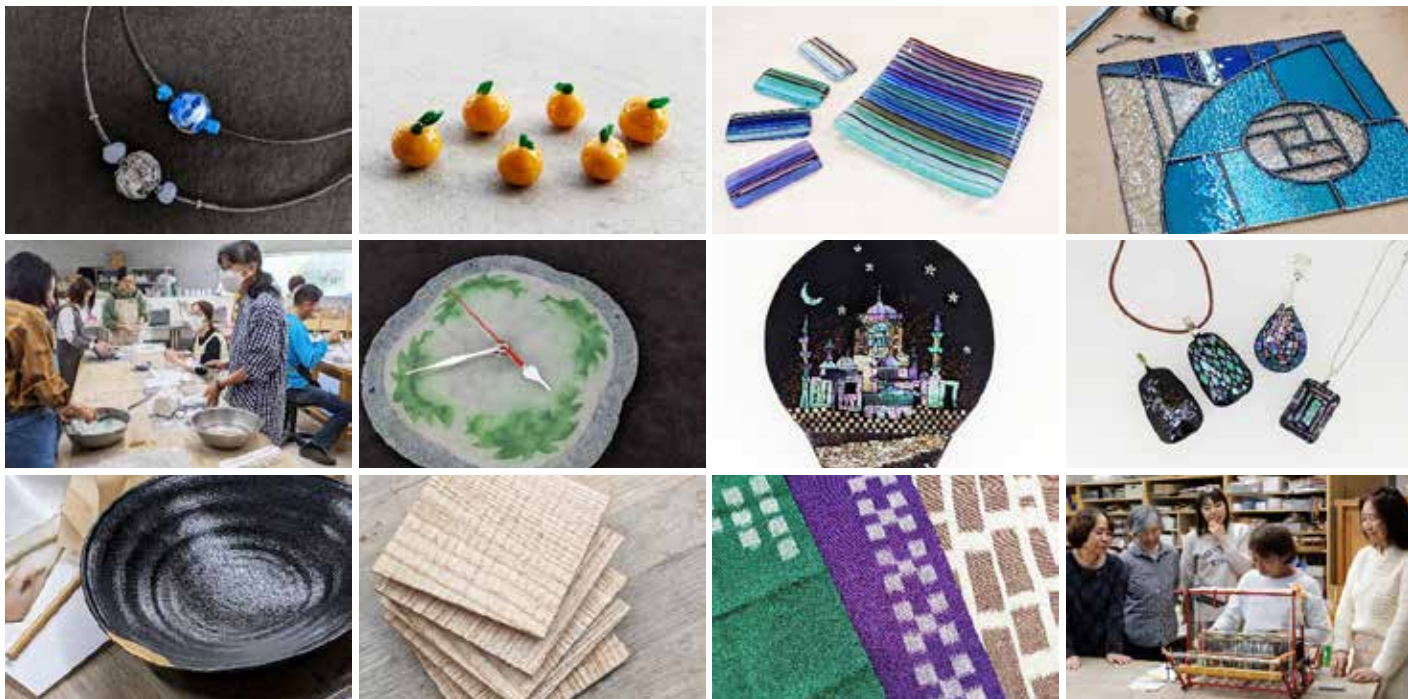
会期:2024年10月8日(火)～11月29日(金)

10:00～17:00 (月曜日、10月26日、27日休館)

来場者数:1770名



市民工房



期 間：前期／令和 6 年 5 月～10 月 後期／令和 6 年 10 月～令和 7 年 3 月

場 所：長岡造形大学 市民工房

参加料：各講座指定の受講料及び材料費

参加人数：285 名

前期講座

【硝 子】 バーナーワークとんぼ玉／バーナーワークスカルプチャー

講師：柳沼 齋子

フュージングガラスのお皿とスプーンレスト／

フュージング／ステンドグラス

講師：丸山 淳代

パート・ド・ヴェールでつくるガラスのオーナメント／

パート・ド・ヴェール

講師：近藤 綾

【漆 芸】 厚貝螺鈿細工

講師：藤橋 郁美子

金継ぎ

講師：飯塚 直人

【木 工】 手彫りの木のコースター

講師：飯塚 直人

【染 織】 ポップアナ織りのバッグ

講師：齋藤 伸絵

後期講座

【硝 子】 バーナーワークとんぼ玉／バーナーワークスカルプチャー

講師：柳沼 齋子

フュージング技法でつくるガラスのリース／

フュージング／ステンドグラス

講師：丸山 淳代

パート・ド・ヴェールで技法つくるガラスのトレイ／

パート・ド・ヴェール

講師：近藤 綾

【漆 芸】 螺鈿アクセサリー

講師：藤橋 郁美子

金継ぎ

講師：飯塚 直人

【染 織】 手織りのミニマフラー／バウンドローズパスの織物

講師：齋藤 伸絵

通年講座

【漆 芸】 漆工芸 1／漆工芸 2

講師：藤橋 郁美子

【染 織】 染織基礎／染織応用

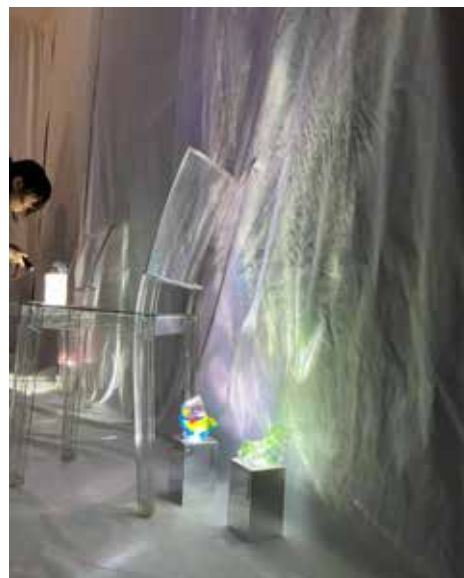
講師：齋藤 伸絵

市民工房は文化あふれる新潟県の実現を目指し、「ものづくり」を通して市民と大学がつながり、大学をより身近に感じてもらう取り組みとして、平成 22 年春に市民向けの工房として開設しました。

令和 6 年度の市民工房は硝子・漆芸・木工・染織の 4 講座 41 クラスを 285 名の方が受講されました。また、講座受講のきっかけづくりとして、より気軽に市民工房を体験できる 1～2 回で完結する短期講座を実施しました。

※所属等はプロジェクト当時のもの

こどもものづくり大学校



「まなび」と「あそび」の観点から、ものづくりを通して豊かな感性と創造力を育むことを目的に、小学生を対象とした「こどもものづくり大学校」を平成23年から開講しています。

令和6年度は全8種類の講座に延べ140人の小学生が参加しました。

学生スタッフと小学生が交流しながら作品を完成させていく形で講座を実施することができました。

前期（4月募集）

【パート・ド・ヴェールで小皿をつくろう】

講師：近藤 綾（市民工房 講師）

参加人数：20名

日程：全2回

1回目 5月26日（日）9：30-12：00

2回目 6月16日（日）13：00-15：30

【裂いた布を織ってさき織りコースターを作ろう！】

講師：齋藤 伸絵（市民工房 講師）

参加人数：17名

日程：全1回

7月20日（土）

9：30-12：30、13：30-16：30

【金属を溶かしてメダルをつくろう】

講師：長谷川 克義（長岡造形大学 美術・工芸学科 准教授 大学院兼任教員）

参加人数：20名

日程：全1回

7月6日（土）

9：30-12：30、13：30-16：30

後期（9月募集）

【小国和紙の動物型ランプシェード折り紙を作ろう】

講師：池山 崇宏（オリガミデザイン代表）

参加人数：5名

日程：全1回

10月20日（日）9：30-12：00

【カラフルなガラスを並べて小皿をつくろう】

講師：

小川 沙織（niniko glass）

参加人数：20名

日程：全1回

11月9日（土）13：00-15：00

11月17日（日）13：00-15：00

【子どもカメラマンになろう！】

講師：海津 千並（umesphoto フォトグラファー）

参加人数：19名

日程：全1回

11月10日（日）10：00-15：00

後期（1月募集）

【スタンド照明をつくり、溢れ出す光で『感情空間』を表現しよう！】

講師：岡井 美奈（長岡造形大学 建築・環境デザイン学科 助教 大学院兼任教員）

参加人数：20名

日程：全1回

3月22日（土）13:00～16:30

【マグカップとお皿を作ってみよう！使ってみよう！】

講師：風間 真（陶芸作家 長岡造形大学 地域協創課）

参加人数：19名

日程：全2回

1回目 3/2（日）

9:30～12:00、13:00～15:30

2回目 3/23（日）

10:00～11:00、13:00～14:00

まちなかキャンパス長岡



まちなかキャンパス長岡は、市民の方々の「学び」のニーズに応え、世代や地域を越えた交流をより盛んにすることを目的に、長岡市内の4大学1高専（長岡技術科学大学、長岡大学、長岡崇徳大学、長岡工業高等専門学校と本学）が長岡市と連携して企画運営しています。

長岡駅前を拠点に、「まちなかカフェ」「まちなか大学」「まちなか大学院」「こども講座」など様々なテーマの講座をプロデュースし、各講座では4大学1高専の教員を始め、多くの方が講師を務めています。本学教員らも専門分野の枠を超えて講座を行いました。

■まちなかカフェ

令和6年4月13日（土）	与板の“あやしい”街歩き	准教授 北 雄介
令和6年5月24日（金）	作者が語るミライエ長岡の壁画	教授 遠藤 良太郎

■まちなか大学

令和6年9月25日（水） ～10月23日（水） 毎週水曜日	ものづくりのスヌメ【全5回】 ①現代ものづくり事情 ②ギリギリ役に立つモノ ③お父さんがこどもの誕生日につくるモノ ④モノをつくる環境とアイデアスケッチ ⑤自分のアイデアをみてもらう	教授 真壁 友 (コーディネーター、①④⑤講師)
-------------------------------------	--	-----------------------------

■こども講座

令和6年7月31日（水）	繭から糸へ！栃尾紬の糸づくりに挑戦	教授 菊池 加代子
令和6年8月9日（金）	小国和紙を漉いてオリジナルはがきをつくろう	長岡造形大学紙漉きサークル
令和6年8月10日（土）	ミライエ長岡のピクトグラムをみんなで生み出そう！	准教授 吉川 賢一郎
令和6年8月16日（金）	家づくりボードゲーム「ケンチCube」で遊ぼう！	教務補助職員 林 飛良
令和6年8月19日（月）	木箱の楽器「カホン」をつくって演奏しよう！	准教授 羽原 康成 長岡造形大学木匠塾 代表 久保田 理惟

第 27 回長岡市中学校美術部作品展



第27回
長岡市中学校美術部作品展
11/23、24
13:00-17:00 9:00-15:00



主催：長岡造形大学
共催：新潟県立近代美術館
後援：長岡悠久ライオンズクラブ、長岡市教育委員会

ウェブサイトも開通します <https://chubiten.nagaoka-id.ac.jp/>



日時：令和 6 年 11 月 23 日（土）13:00～17:00
令和 6 年 11 月 24 日（日）9:00～15:00
会場：新潟県立近代美術館 2 階ギャラリー
来場者数：444 名
主催：長岡造形大学
共催：新潟県立近代美術館
後援：長岡悠久ライオンズクラブ、長岡市教育委員会

本学専門分野の入口で努力している長岡市内中学校美術部の部活動を支援することを目的に実施しており、コンクール形式としないことで自由に活動成果を発表できる場を提供しています。

第 27 回となる令和 6 年度は長岡市内 11 校が参加し、会場展示と作品掲載ができる特設サイトを使って開催しました。会場では 180 名の作品が一堂に並び、（展示数 176 点 うち平面 164 点、立体 12 点）、特設サイトでは 94 作品を掲載しました。また作品展参加校共通のテーマを設けた制作では、今年度は「タイムトラベル」をテーマに取り組みました。なお、ポスター、フライヤー、パンフレットの原画は中学生が描きました。

※所属等はプロジェクト当時のもの

特別講義

地域・市民の方々と大学の交流、地域発展に寄与することを目的に、本学では特別講義を一般の方に公開しています。令和6年度は「美術・工芸特別講義」、「デザイン特別講義」、「建築・環境デザイン特別講義」の全12回の授業を公開しました。

美術・工芸特別講義 (全4回)

- 令和6年6月6日(木)
この星の絵の具 (新世界)
講師: 小林 正人
- 令和6年6月13日(木)
美術のこと、美術じゃないこと
講師: 中崎 透
- 令和6年7月4日(木)
ある視点から抽出した造形表現
講師: 岩田 広己
- 令和6年7月11日(木)
記す、刻む
講師: 小曾川 瑠那

デザイン特別講義 (全4回)

- 令和6年9月27日(金)
「日本写真の現在」
講師: 瀬戸 正人
- 令和6年10月4日(金)
思考の土壌を豊かにするデザイン
講師: 川上 典李子
- 令和6年10月11日(金)
デザインマネジメントの可能性
講師: 松本 有
- 令和6年12月20日(金)
Material Experience Design: マテリアルから紡ぐ体験のデザイン
講師: 筧 康明

建築・環境デザイン特別講義 (全4回)

- 令和6年9月27日(金)
コミュニティデザインと海外における事例紹介
講師: 伊藤 拓次郎
- 令和6年11月22日(金)
シン・建築ストックの有効活用における専門家の役割
ーひらかれる建築・「民主化」の作法ー
講師: 松村 秀一
- 令和6年11月29日(金)
シン・歴史的建造物の価値 発見と創造
講師: 後藤 治
- 令和6年12月13日(金)
脱炭素社会実現に住宅・建築分野は何ができるか
講師: 田辺 新一

出張講義



上川西ニコニコ大学

日時: 令和7年3月21日(金) 13:45-14:45

会場: 上川西コミュニティセンター

講師: 水川 毅 (デザイン学科 教授)

演題: 「昭和の広告で

懐かしのキャッチコピーを振り返る」

対象: 上川西地域住民

主催: 上川西コミュニティセンター

本学近隣の上川西コミュニティセンターを会場に「ニコニコ大学」と題して本学教員の講演会が開催されました。

ニコニコ大学は、同センターが主催する高齢者向けの生涯学習教室で、10年以上前から年1回程度、本学教員も講義を行っています。

今回は水川教授が、「戦後の広告」、「高度経済成長期の広告」と年代別に分けて懐かしのCMを紹介しました。CMで使われているキャッチコピーや動画について、当時の様子や暮らし等が言葉や映像に反映されていること等、詳細に解説をいただきました。参加者は懐かしのCMソングに合わせて口ずさんだり、参加者同士で感想を言い合う姿が見受けられ、終始楽しみながら受講いただきました。

※所属等はプロジェクト当時のもの



長岡市が取り組む「熱中！感動！夢づくり教育事業」の一環として「夢づくり工房 in 長岡造形大学」と題し、本学を会場としたものづくり講座を提供しました。

令和6年度も2講座計4回を実施しました。こどもたちは目を輝かせながら黙々と取り組み、ものづくりの楽しさや面白さをたっぷり味わってくれました。

日時：令和6年8月7日（水）

会場：長岡造形大学

主催：長岡市

講座：①「オリジナルTシャツを作ろう！」

講師：若子 jet（デザイン学科 助教）

対象：小学3～6年生

参加人数：38人

②「曲げ木とハンカチでエコバッグを作ろう」

講師：山田 英嗣（デザイン学科 助教）

対象：小学3～6年生

参加人数：21人

長岡造形大学附属図書館



附属図書館は本学における教育および学術研究の向上を図るために必要な図書館資料を収集、整理、保管しています。デザイン、アートに関する専門書をはじめ、最新のデザイン、アートの潮流を伝える専門雑誌や、各種メディアによる視聴覚資料まで揃っている他、貴重書や独自のコレクションも充実しています。

義務教育終了以上でデザインに興味を持って学習・研究する一般の方へ、図書館を開放しております。利用を希望する方は、運転免許証など本人が確認できるものを持参の上、カウンターに申し込んでください。図書館利用証を発行します。なお、利用は閲覧のみで貸出はできません。



公立大学法人

長岡造形大学

Nagaoka Institute of Design

長岡造形大学 地域協創センター

〒940-2088 新潟県長岡市千秋4丁目197番地

Tel : 0258-21-3321 Fax : 0258-21-3362

E-mail : chiiki@nagaoka-id.ac.jp



長岡造形大学 地域協創センター

<https://www.nagaoka-id.ac.jp/about/society/>



長岡造形大学 フェイスブック

<https://www.facebook.com/nagaoka.id/>



長岡造形大学 ツイッター

https://twitter.com/n_i_d